

『歴史教育史研究』第 17 号（2019 年度）、歴史教育史研究会、34～84 頁

《史料研究》

実教出版『高校世界史』白表紙本に見る 1977 年度の教科書検定について
— 二谷貞夫所蔵本を中心に —（上）

茨木 智志・大木 匡尚

はじめに

本稿の目的は、1979 年発行の実教出版『高校世界史』に対して 1977 年度に実施された教科書検定について、二谷貞夫氏が所蔵している白表紙本を中心にして、その検定がいかなるものであったのかを提示することにある。

本稿での具体的な取り組みは次の 2 点である。第一に、「実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）」に対して口頭で指示された教科書調査官による「条件」（「意見」）を、二谷貞夫氏の所蔵本に記載されたメモ等を通じて確認し、それを示すことである。数え方にもよるが、約 470 か所に及ぶ。第二に、その検定の対象となった実教出版『高校世界史』がどのような意図をもって作成されたのか、それがどのような制度や状況のもとで検定を受けたのかなど、教科書調査官による「条件」を読む際に必要な背景や情報を示すことである。第二の点については、以下の本文において述べ、第一の点については稿末に資料として記載した。

当時の教科書検定においては修正等の「条件」の指示は原則として口頭でなされていた。これらの指示された「条件」を歴史研究の資料としてすべて提示したことは、これまでほとんどなかったものと思われる。歴史教育の歴史研究、さらには教育行政や教科書の歴史研究の資料としての活用が期待される。

本稿の位置づけに関わり、次の 2 点も指摘しておきたい。

一つは、この実教出版『高校世界史』（1979 年発行）は、高校の教育現場から、従来の世界史教育を大きく変革することを意図した教科書であった。それは、歴史教科書なるものを変えていくこと、そして世界史の構成や記述を根本から変えていくことを試みたものであった。その意図に対して文部省が検定を通じてどのように対応したのかが一つの焦点となる。

もう一つは、1977 年度（1978 年 2 月末）の時点において、日本の「侵略」という教科書記述に対して「A」としてその書き換えが検定合格の条件とされていたことである。1982 年の教科書問題は当時の新聞報道の「誤報」によるものという言説が広められており、一部にそれを自明視した論も見受けられる状況にあるが、すでに 1977 年度実施の教科書検定において「侵略」の書き換え指示が事実として存在したことが確認できる。

1. 実教出版『高校世界史』について

ここで取り上げる実教出版『高校世界史』の執筆者は、次の7名であった（記載順と所属は1979年発行の奥付による）。

吉田悟郎（東京都立広尾高等学校教諭）	1921 年生まれ
鈴木 亮（東京都立町田高等学校教諭）	1924 年生まれ
大江一道（東京都立上野高等学校教諭）	1928 年生まれ
槐 一男（横浜市立岡野中学校教諭）	1929 年生まれ
二谷貞夫（筑波大学附属高等学校教諭）	1938 年生まれ
鬼頭明成（東京都立小石川高等学校教諭）	1940 年生まれ
石渡延男（正則高等学校教諭）	1942 年生まれ

執筆者としては、東京都歴史教育者協議会の世界部会に参加していた、高校で世界史を担当する教師たちを中心として、高校で日本史を担当する鬼頭明成と中学校で社会科を担当する槐一男が加わっている。検定時において30歳代半ばから50歳代半ばの中学・高校の社会科教師による世界史教科書であった。

ここで取り上げる実教出版『高校世界史』は、次の3種が発行されたものである（著者名の記載、使用年度は該当の各教科書目録による）。

- ①『高校世界史』吉田悟郎・鈴木亮・大江一道ほか4名、実教出版、
1978年3月31日検定、1979年1月25日発行（世史439）
（1979～1983年度使用）
- ②『高校世界史』吉田悟郎・鈴木亮・大江一道ほか4名、実教出版、
1983年3月31日検定、1984年1月25日発行（世史016）
（1984～1986年度使用）
- ③『高校世界史 改訂版』吉田悟郎・鈴木亮・大江一道ほか4名、実教出版、
1986年3月31日改訂検定、1987年1月25日改訂版発行（世史046）
（1987～1995年度使用）

本稿では上記の「①」である1979年度から使用された最初の教科書に対する検定を対象としており、本稿での「実教出版『高校世界史』」という用語は、この教科書を指して使用する¹。

¹ なお、実教出版には同名の世界史教科書が前後の時期に存在する。特に、1955年度に検定に合格して1956～1958年度に使用された上原専祿監修『高校世界史』（実教出版、1955年9月13日検定、高

2. 実教出版『高校世界史』の発行までの経緯と関連する教科書資料

実教出版『高校世界史』の編集開始から発行そして使用開始までは以下のような経緯があった（下線は、関連する教科書資料にあたる）。

1974 年 10 月：編集開始。

1977 年 9 月：提出した白表紙本（第 1 回）が不合格の通告を受けて、以後、修正の作業。

1977 年 12 月：白表紙本（第 2 回）を文部省に提出。

1978 年 2 月 27 日・28 日：「条件付き合格」となり、執筆者 7 名と編集者が文部省で「条件」（「意見」）の提示を受ける。以後、修正の作業。

1978 年 3 月：内閣本を文部省に提出。これをもとに編集者が文部省と対応。内閣本合格の後に見本本を文部省に提出。

1978 年 3 月 31 日付：文部省検定済となる。
後に 1979 年度使用の教科書目録に記載される。

1979 年 1 月 25 日付：供給本発行。

1979 年 4 月：使用開始。

1974 年 10 月に編集が開始され、「月 2 回以上」「長期休業毎の合宿編修会議」が繰り返されて²、1977 年度に検定を申請した。白表紙本（第 1 回）の原稿は審査の結果、9 月 16 日に「不合格」となり、修正して作成した白表紙本（第 2 回）の原稿を 12 月に再提出した。この白表紙本（第 2 回）は審査の結果「条件付き合格」となり、1978 年 2 月 27 日・28 日にその条件が執筆者と編集者に提示された。本稿が取り上げているのは、この部分になる。規定では、その条件を受けて修正を付した内閣本を 3 月に提出して審査を受け、その内閣本が合格した後に、見本本を提出したはずである（内閣本と見本本は、筆者未確認）。この見本本審査を経て、1978 年 3 月 31 日付で検定済となった³。そして 1979 年度用の教科書目録に掲載され⁴、1979 年 1 月 25 日付で発行された教科書が 4 月から使用された。

社 1060) が、1957 年度と 1958 年度の検定に不合格とされて一般書として発行されたことで知られる（上原専禄監修『日本国民の世界史』岩波書店、1960 年）。この執筆には吉田悟郎も参加していた。

² 鬼頭明成「東アジア世界史の試み」実教出版編修部編『高校世界史 指導書』（世史 439 教授用指導書）実教出版、（1979 年）、419～420 頁。同書は、教科書研究センター所蔵のものを利用した。

³ 1978 年 7 月 14 日文部省告示第 146 号として 188 種の教科書に 1978 年 3 月 31 日付で「検定を与えた」ことが公示されている（『官報』第 15449 号、1978 年 7 月 14 日）。

⁴ 文部省（発行）『高等学校用教科書目録（昭和 54 年度使用）昭和 53 年 4 月』、1978 年 5 月 15 日、17 頁。

次に、以上の流れの中に登場する下線で示した実教出版『高校世界史』の6つの関連資料について述べる。なお、名称は基本的に本稿での仮称である（以下、注記を含めてこの名称を使用する）。

①「実教出版『高校世界史』白表紙本（第1回）」⁵

1977年度の教科書検定のために最初に文部省に提出されて9月に「不合格」となったものである。表紙・背表紙・扉・奥付に一切の記載はない（そのため上記の書名は次の「②」を参考にして仮に付した）。表紙から裏表紙までの内容は以下のようになっている。

表紙、表見返し（「世界の諸地域」地図）、口絵（9頁分）、扉（白紙：1頁）、「新しい世界史像の自主的形成にむけて」（2～6頁）、「目次」（7～10頁）、本文（1～343頁）、「人名索引」（344～347頁）、「事項索引」（348～356頁）、折り込み年表（2枚表裏）、奥付部分の白紙、裏見返し（「おもな国の興亡対照表」）、裏表紙

なお、書き込みなどはなされていない。

②「実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）」⁶

本稿はこの資料を主な対象としている。上記「①」の「不合格」を受けて修正し、1977年12月に文部省に提出して1978年2月に「条件付き合格」となったものである。表紙に「高等学校／社会科／世界史／第1～3学年」（「／」は改行）と印刷され、手書きで「（条件つき合格本）」と記載されている。背表紙には「高社 世界史 第一—三学年」と印刷され、手書きで「第二回」と記載されている（上記の書名はこの「第二回」の記載を参考にして仮に付した）。表紙から裏表紙までの内容は以下のようにになっている。

表紙、表見返し（「世界の諸地域」地図）、口絵（9頁分）、扉（「とびら」の印）、「はじめに」（2～4頁）、「もくじ」（1～4頁）、本文（1～322頁）、「人名索引」（323～327頁）、「事項索引」（328～341頁）、「地域別索引」「略語一覧」（342頁）、奥付（「奥付」の印）、折り込み年表（2枚表裏）、裏見返し（「おもな国の興亡対照表」）、裏表紙

二谷貞夫所蔵本には非常に多くの書き込みがなされている。その詳細は以下で述べる。扉は白紙で「とびら」という印が押されているが、ここに手書きで「1977.12 再提出」「'78 2/27 合格条件提示（文部省）」「2/28」とメモが残されている。

③「実教出版『高校世界史』内閣本⁷」

「実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）」への「条件」提示を受けて修正を施した上で文部省に提出したものである。内閣本に対しても審査があり（校正刷

⁵ 鬼頭明成氏所蔵のものを閲覧した。

⁶ 二谷貞夫氏所蔵のものを閲覧した。

⁷ 後述するように文部省ではこれを「校正刷」と呼んでいたが、当時の一般的な名称として「内閣本」という名称をここでは使用する。

審査)、出版社の編集担当者が文部省の教科書調査官に対応するのが普通であった。この「実教出版『高校世界史』内閣本」は確認できていない。

④「実教出版『高校世界史』見本本」

内閣本が合格した後に教科書として完成させて最終的な審査のために文部省に提出したものである。この「実教出版『高校世界史』見本本」も確認できていない。通常であれば、その内容は供給本と同じはずである。

⑤「実教出版『高校世界史』供給本」

発行されて授業で使用されたものである。書誌については「1」に記載した。表紙から裏表紙までの内容は以下のようになっている。

表紙、表見返し（「世界の諸地域」地図）、口絵（9頁分）、扉（1頁）、「はじめに」（2～4頁）、「もくじ」（1～4頁）、本文（1～315頁）、「人名索引」（316～320頁）、「事項索引」（321～334頁）、「地域別索引」「略語一覧」（335頁）、奥付、折り込み年表（2枚表裏）、裏見返し（「諸国の興亡対照表」）、裏表紙

量的に変化が大きいのは本文のページ数である。①「白表紙（第1回）」が343、②「白表紙（第2回）」が322、そして、この⑤「供給本」が315となっている。内容の変化については以下で述べる。

3. 実教出版『高校世界史』の目指したこと

実教出版『高校世界史』は、特に世界史教科書としては地域世界の設定、時代の区分、叙述の方法を特徴としている。その根底には、課題化認識による世界史像の自主形成という上原専祿の主張があった。そして、世界史学習を通して、「現在の日本や世界のかかえている問題をつかむ方法や力を…しっかりと身につけていく⁸」、そのための「手がかり」として世界史教科書はあるべきと位置づけている⁹。

鈴木亮は、「世界史像の自主形成のための手がかりとしての」世界史教科書として、以下の4点の「せまり方、編修の方針」を提示している¹⁰。

- ・日本史と世界史の統一的な把握という課題に迫ることの試み
- ・それぞれの地域世界が、対等な立場で構成している地球的全世界の歴史像をえがくことの試み
- ・世界史を、政治・経済・社会・文化を含む全体像としてとらえることの試み
- ・世界史の担い手としての民衆・地域住民・民族・階級の立場から世界史をとらえることの試み

そのため、第一に、世界を構成する諸地域世界として、それぞれの「個性と問題」

⁸ 実教出版『高校世界史』供給本、「はじめに」、2頁。

⁹ 鈴木亮「客観的でいきいきした教科書を」実教出版編修部編・前掲『高校世界史 指導書』、14頁。

¹⁰ 同上、21～24頁。

に即して9つの諸地域世界を設定した(表1を参照)¹¹。そして「これらの9地域世界がたがいにかみあい、たがいによつてはたらきかけあい、作用しながら、全世界の動きと問題をつくりだしてきたか、そしてそれが、日本にどうかかわってきたのかを学習」するものとした。それにより世界の「全体像」が浮かび上がり、同時にその中に「日本を位置づけ、世界が日本をつくり、日本が世界をつくっている過程をつかんでいく」ものとした。通常の世界史教科書で古代オリエント、古代ギリシア、古代ローマと記述が進む西洋史を中心とした世界史観を批判した構成となっている。さらに、同様の観点から人類の発生などの人類史を世界史記述の対象から外している。一方で、通常の世界史教科書ではほとんど記述の対象とされてこなかった地域世界における具体的な人物や出来事を積極的に取り上げた。関連して、通常の世界史教科書と比べて日本史の内容が非常に多く取り上げられている。また、各地域世界間の関係を重視したため、参照ページの注記や記述の繰り返しを意図的に行なっていた。

第二に、時代区分について「各地域世界が一つの世界として動きはじめた時期を13世紀半ば」に置いて、ここを世界史の成立とした¹²。つまり、通常の世界史教科書の基本となっていた「古代」「中世」「近代」という3区分法や「奴隷制時代・封建制時代・資本主義時代」という発展段階による時代区分法を採らなかった¹³。そして、「13世紀半ば」以前を世界史成立の前史として「第1部 前史」として、以後を「世界の一体化がはじまり展開した本史」と位置づけた。「本史」は第一次世界大戦前後で「I」と「II」に分け、「I」はさらに19世紀とその前とで「(1)」「(2)」に分けて、以下のように全体を4部構成とした¹⁴。

「第1部 前史」：13世紀半ば以前

「第2部 本史 I (1)」：13世紀半ば以後

「第3部 本史 I (2)」：19世紀を軸とする時期

「第4部 本史 II」：第一次世界大戦以後

この時代区分のもとで、実教出版『高校世界史』白表紙本(第1回)では、第1部から第4部まで、すなわち歴史記述の始めから現在までのすべてを、前述の9地域世界による9章だての縦割りで構成した。これが不合格になったため、実教出版『高校世界史』白表紙本(第2回)では、第1部・第2部は9地域世界を7章だてとして縦割りを残し、第3部・第4部は時代別の横割りに修正されている(以上、表1参照)。

¹¹ 以下の記述は、実教出版『高校世界史』供給本の「はじめに」(3頁)による。

¹² 実教出版『高校世界史』供給本、「はじめに」、4頁。

¹³ 鈴木亮「客観的でいきいきした教科書を」実教出版編修部編・前掲『高校世界史 指導書』、23頁。

¹⁴ 実教出版『高校世界史』供給本、「はじめに」、4頁。ただし、実教出版『高校世界史』の1984年度以降に使用された改訂版では4部構成は変わらないが、「前史」「本史」という名称の使用をやめている。

第三に、叙述の方法について、第一と第二の点に関わって各地域世界の主体的な歴史形成を理解するために「客観的でいきいきとした」描き方を目指した。そのため、これまでの世界史教科書ではほとんど無視されてきたけれども理解に必要な人物や文化などの具体的な固有名詞を、積極的に取り上げた¹⁵。そして、単に取り上げるだけでは「夾雑物」になるだけであり、全体の構造が大切であると主張した。この点に関する例として鈴木亮は、中南米の独立におけるハイチ独立について、「ハイチをぬかしでは、中南米の歴史が成り立たないという位置づけ、中南米史の全体構造、世界史全体のなかでの中南米史の構造関係がとらえられていなければならない。有機的で統一的で、しかも客観的であるようなとらえ方がされているかどうかである」と説明している¹⁶。さらに、教えるだけでなく「生徒といっしょに考える教科書」に必要な叙述のあり方を提示している¹⁷。関連して、読める教科書を目指しており、文中に用語の太字は設けないこととしていた。

以上のことは、歴史教科書のあり方を変え、それまでの世界史の構造や記述を根本から変えていくことの試みであった。実教出版『高校世界史』は、高校の教育現場から、従来の世界史教育を大きく変革することを意図した教科書であったといえよう。

表 1：1977 年度検定における実教出版『高校世界史』白表紙本の第 1 回と第 2 回の目次の対照（附・供給本の目次）

実教出版『高校世界史』白表紙本（第 1 回）	実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）・供給本
新しい世界史像の自主的形成にむけて	はじめに
第 1 部 前史	第 1 部 前史
第 1 章 東アジア世界	第 1 章 東アジア世界
§ 1. 東アジア世界の形成	§ 1. 東アジア世界の形成
§ 2. 東アジア世界の展開	§ 2. 東アジア世界の展開
§ 3. 東アジア世界の変動	§ 3. 東アジア世界の変動
§ 4. モンゴル民族の活動と東アジア	
第 2 章 東南アジア世界	第 2 章 東南アジア世界と南アジア世界
§ 1. 大陸部の国ぐにの形成	§ 1. 東南アジア世界

¹⁵ 「座談会・新しい世界史像の形成をめざして」実教出版編修部編・前掲『高校世界史 指導書』、6 頁。

¹⁶ 鈴木亮「客観的でいきいきした教科書を」実教出版編修部編・前掲『高校世界史 指導書』、15～16 頁。

¹⁷ 以下の 6 点を提示している（同上、14 頁）。①生徒に密着していく発想、子どもをはげましていく記述、②各人がもっている常識に対して、疑問をもつようにはいっていく、③はっとするような話がないと、生徒の偏見とぶつかりあうことができない、④読んでわかると同時に、ひっかかる記述が必要ではないか、いまの教科書は、わかったような気になる叙述である、⑤わからないことはわからないと書く、⑥生徒の生活感情のなかにひそんでいる世界観・偏見をひきだしながら変えていく、それに適した歴史場面を設ける。

§ 2. 海洋の国ぐに	§ 2. 南アジア世界
第3章 南アジア世界	
§ 1. インド諸王国の誕生	
§ 2. インド諸地域の発展	
第4章 西アジア・北アフリカ世界	第3章 西アジア・北アフリカ世界
§ 1. 西アジア・北アフリカ世界の形成	§ 1. 西アジア・北アフリカ世界の形成
§ 2. アラブ人の世界支配	§ 2. イスラム世界の成立
§ 3. 東方・西方イスラム世界の展開	§ 3. イスラム世界の展開
§ 4. 十字軍とモンゴル軍の侵略	§ 4. 十字軍とモンゴル軍の侵入
第5章 ヨーロッパ世界	第4章 ヨーロッパ世界
§ 1. 地中海世界の形成	§ 1. 地中海文化の形成
§ 2. ローマ帝国の展開	§ 2. ローマ帝国の展開
§ 3. 東ヨーロッパ世界の形成	§ 3. 東ヨーロッパ世界の芽生え
§ 4. 西ヨーロッパ世界の形成	§ 4. 西ヨーロッパ世界の成立
第6章 アフリカ世界	第5章 アフリカ世界
§ 1. アフリカ文明	
§ 2. アフリカ諸王国の形成	第6章 アメリカ世界と太平洋世界
第7章 アメリカ世界	§ 1. アメリカ世界
第8章 太平洋世界	§ 2. 太平洋世界
第9章 北方ユーラシア世界	第7章 北方ユーラシア世界
§ 1. 北方ユーラシア世界の成立	§ 1. 北方ユーラシア世界の成立
§ 2. 北方ユーラシア世界の展開	§ 2. 北方ユーラシア世界の展開
〈中間主題〉騎馬民族の社会と文化	§ 3. モンゴル帝国の成立
〈中間主題〉イスラム文明とヨーロッパ(7～12世紀)	中間主題 イスラム文化とヨーロッパ
第2部 本史I (1)	第2部 本史I (1)
序章 世界史の一体化のはじまり	世界史の一体化のはじまり 【供給本で削除】
第1章 東アジア世界	第1章 東アジア世界
§ 1. 明朝と東アジア	§ 1. 元・明と東アジア
§ 2. 清朝と西方世界	§ 2. 清と西方世界
第2章 東南アジア世界	第2章 東南アジア世界と南アジア世界
§ 1. 東南アジアとイスラム教	§ 1. 東南アジア世界
§ 2. ヨーロッパ人勢力の来航と諸国の発展	
第3章 南アジア世界	§ 2. 南アジア世界
§ 1. ムスリムのインド支配と南インド	
§ 2. ムガル帝国	
第4章 西アジア・北アフリカ世界	第3章 西アジア・北アフリカ世界

§ 1. 14～15 世紀の西アジア	§ 1. 14～15 世紀の西アジア
§ 2. オスマン＝トルコのヨーロッパ進出	§ 2. オスマン帝国のヨーロッパ進出
第5章 ヨーロッパ世界	第4章 ヨーロッパ世界
§ 1. 新しいヨーロッパの動き	§ 1. ヨーロッパの変化
§ 2. 植民帝国の台頭	§ 2. 植民帝国の台頭
§ 3. 国際社会の形成	§ 3. 絶対主義の時代
§ 4. ヨーロッパの転換	
第6章 アフリカ世界	第5章 アフリカ世界
第7章 アメリカ世界	第6章 アメリカ世界と太平洋世界
§ 1. ヨーロッパ人勢力と中南米の接触	§ 1. アメリカ世界
§ 2. アメリカ合衆国の成立	§ 2. 太平洋世界
第8章 太平洋世界	
第9章 北方ユーラシア世界	第7章 北方ユーラシア世界
〈中間主題〉オスマン＝トルコと西ヨーロッパ（15～16 世紀）	中間主題 オスマン＝トルコと西ヨーロッパ
第3部 本史I（2）	第3部 本史I（2）
第1章 ヨーロッパ世界	第1章 欧米の変革
§ 1. ウィーン体制と解放運動	§ 1. 産業革命と市民革命
§ 2. 近代ヨーロッパの展開	§ 2. ウィーン体制と解放運動
§ 3. 帝国主義的ヨーロッパの形成	§ 3. ヨーロッパの民族運動と革命の展開
§ 4. 第一次世界大戦	
第2章 アメリカ世界	第2章 北米の発展と中南米諸国の独立
§ 1. 北アメリカ大陸の展開	§ 1. 北アメリカ大陸の展開
§ 2. 中南米諸国の独立	§ 2. 中南米諸国の独立
§ 3. アメリカ帝国の出現	
第3章 西アジア・北アフリカ世界	第3章 植民地支配の拡大と諸民族の抵抗
§ 1. 18～19 世紀の西アジア・北アフリカ	§ 1. 19 世紀の西アジア・アフリカ
§ 2. 帝国主義と西アジア	§ 2. 19 世紀の南アジア・東南アジア
§ 3. 第一次世界大戦と西アジア・北アフリカ	§ 3. 19 世紀の東アジア
第4章 アフリカ世界	第4章 帝国主義世界の形成
§ 1. アフリカ世界と帝国主義	§ 1. 欧米帝国主義の成立
§ 2. アフリカ諸民族の抵抗	§ 2. 西アジアの民族運動とアフリカ・太平洋の分割
第5章 南アジア世界	§ 3. インド・東南アジアの民族運動の発展
§ 1. インドの独立運動のはじまり	§ 4. 東アジアの変動
§ 2. 帝国主義のはじまりとインド	§ 5. 第一次世界大戦前夜の世界
第6章 東南アジア世界	
第7章 太平洋世界	

第8章 北方ユーラシア世界	
第9章 東アジア世界	
§ 1. 欧米の侵略と東アジアの対応	
§ 2. 帝国主義と東アジア	
§ 3. 日露戦争と第一次世界大戦	
〈中間主題〉 世界史としての19世紀	中間主題 世界史としての19世紀
第4部 本史Ⅱ	第4部 本史Ⅱ
第1章 ヨーロッパ世界	第1章 第一次世界大戦とベルサイユ体制
§ 1. ロシア革命	§ 1. 第一次世界大戦と世界
§ 2. ベルサイユ体制	§ 2. ロシア革命とベルサイユ体制
§ 3. ファシズムと1930年代	§ 3. 第一次世界大戦後の欧米
§ 4. 第二次世界大戦と戦後世界	§ 4. 第一次世界大戦後の民族運動
§ 5. 冷戦体制の成立と展開	§ 5. 第一次世界大戦後の東アジア
§ 6. 現代のヨーロッパ	
第2章 アメリカ世界	第2章 世界恐慌と第二次世界大戦
§ 1. アメリカ合衆国の繁栄と恐慌	§ 1. 世界恐慌とファシズム
§ 2. 大戦間の中南米	§ 2. 日本の中国侵略と抗日運動 【供給本では、「日本の中国侵入と抗日運動」】
§ 3. 第二次世界大戦と南北アメリカ	
§ 4. 現代のアメリカ	§ 3. 第二次世界大戦と世界
第3章 西アジア・北アフリカ世界	第3章 戦後の世界
§ 1. ベルサイユ体制と西アジア	§ 1. 冷たい戦争
§ 2. 西アジア・北アフリカと第二次世界大戦	§ 2. アジアの独立へのあゆみ
§ 3. 現代の西アジア・北アフリカ	§ 3. 西アジア・アフリカの民族運動と平和運動の発展
第4章 アフリカ世界	
§ 1. アフリカと第二次世界大戦	第4章 今日の世界
§ 2. 現代のアフリカ	§ 1. 1960年代以後の欧米
第5章 南アジア世界	§ 2. 1960年代以後の中東・アフリカ・南アジア
§ 1. 南アジアと第二次世界大戦	§ 3. 1960年代以後の東南アジア・東アジアと日本
§ 2. 現代の南アジア	
第6章 東南アジア世界	
§ 1. 東南アジアと第二次世界大戦	
§ 2. 現代の東南アジア	
第7章 太平洋世界	
第8章 北方ユーラシア世界	
第9章 東アジア世界	
§ 1. 東アジアの民衆運動の発展	

§ 2. 1920 年代の日本・中国・朝鮮	
§ 3. 日中戦争から太平洋戦争へ	
§ 4. 新中国の誕生と東アジア	
§ 5. 1960 年代の東アジア	
§ 6. 現代の東アジア	
〈中間主題〉 20 世紀の文化	中間主題 20 世紀の文化【供給本では、「おわりに 20 世紀の文化」】

注：「実教出版『高校世界史』白表紙本（第 1 回）」の目次の記載を基本として、おおむね該当する箇所の右側に「実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）」の目次を記載した。「供給本」の目次はほぼ「（第 2 回）」の目次と同じであるが、その異同について【 】内に注記した。

4. 当時の検定制度における白表紙本の審査

ここで、実教出版『高校世界史』白表紙本の検定に関わる当時の制度を確認しておきたい¹⁸。

「検定は、原稿審査、校正刷審査及び見本本審査の三段階を経て完了する¹⁹」手続きであった。白表紙本の審査は、ここでいう「原稿審査」に当たる。

その検定の基準は、「教科用図書検定基準」において、すべての教科書に共通する 3 つの「絶対条件」（1. 教育目標との一致 2. 教科の目標との一致 3. 立場の公正）²⁰と、社会科教科書に関わる 8 つの「社会科の必要条件」（1. 取扱内容 2. 正確性 3. 内容の程度 4. 内容の選択と扱い 5. 組織・配列・分量 6. 表記・表現 7. 造本 8. 創意工夫）²¹が示されていた。この必要条件の 1～7 については、検定基準の実施細則において教科ごとに細かな規制がなされていた²²。

実教出版『高校世界史』のような「新規検定申請原稿」の調査評定については「調査員および教科書調査官が行」ない、「調査員の数は、同一の原稿について原則三人」とされた²³。教科書調査官は「専ら図書原稿の調査に当たる文部省の常勤職員」であ

¹⁸ なお、1977 年度中の 9 月 22 日に「教科用図書検定規則」（文部省令第 32 号）、「義務教育諸学校教科用図書検定基準」（文部省告示第 183 号）、「教科用図書検定基準実施細則」（初等中等教育局長通知）などが改訂・制定されたが、これは適用されておらず、旧の制度下での教科書検定であった。

¹⁹ 「教科用図書検定規則」第 4 条、文部省令第 4 号、1948 年 4 月 30 日（同日『官報』第 6385 号。なお、文部事務官名の「正誤」〔『官報』第 6394 号、1948 年 5 月 12 日〕を併せて参照した）。

²⁰ 「教科用図書検定基準」第 1 章、文部省告示第 289 号、1968 年 8 月 26 日（同日『官報』第 12510 号）。

²¹ 「教科用図書検定基準」第 2 章第 2 節第 2、文部省告示第 289 号、1968 年 8 月 26 日（同日『官報』第 12510 号）。なお、一部改正が 1969 年 5 月 9 日の文部省告示第 247 号と 1970 年 10 月 16 日の文部省告示第 283 号でなされている。

²² 「教科用図書検定基準実施細則」、1968 年 8 月 26 日、初等中等教育局長通知。

²³ 「教科用図書の検定申請原稿の調査評定および合否判定に関する内規」第一、1968 年 12 月 13 日教科用図書検定調査審議会決定。引用は、久野収・中山千夏・森岡弘道・矢崎泰久・山領健二『検定不合格 倫理・社会』三一書房、1978 年、82～87 頁による（同内規については以下同じ）。

り、調査員は「非常勤の職員」で、「学校の職員及び学識経験者から…委嘱」されていた²⁴。

検定の可否に関わる総合判定としては、教科用図書検定基準の「絶対条件の三項目および必要条件がいずれも合と判定されたものを合格とする。その他のものは不合格とする²⁵」とされた。この中の必要条件については、教科用図書検定基準の必要条件の1～7について別紙の評定尺度により評定して別表により評点をつけて総点1000点とし(8についてはさらに別の表で50点とする)、8の点を加味しつつ1000点中、800点以上のものを合と判定し、800点に満たないものを否と判定するものとされた²⁶。

なお、否と判定されて検定不合格となった場合、「文書で不合格通知書が交付され、教科書調査官が不合格理由を例示しつつ口頭で説明をおこなう」が、「かんたんな文書」であり、説明時間も60分以内と限定されていた²⁷。

原稿(白表紙本)が合と判定された場合でも無条件での検定合格はなく、通常では条件が付された。これを「条件付き合格」と称した。合格原稿に対して付される意見には、「A意見」と「B意見」の2種類があった。「A意見」とは、「原稿が合格と判定された場合、これに訂正、削除または追加など適当な措置をしなければ教科用図書として不適当と認められる事項があるときは、これをA意見として指摘し、これに必要な措置を加えることを条件とする」というものであった²⁸。「A意見」は1か所でも修正がなされなければ、条件を満たさなかったものとされて不合格となった。「B意見」とは、「A意見として指摘するには至らないが訂正、削除または追加などの措置をした方が教科用図書としてよりよくなると認められる事項があるときは、これをB意見として指摘する」というものであった²⁹。「B意見」は修正が合格の条件ではなかったが、修正しない場合は理由書を付けて教科書調査官の承認を得る必要があった。「条件付き合格」となったときには教科書調査官からそれぞれの記述について「A意見」「B意見」などの条件の提示がなされ、期日までに修正等を施した内閣本を提出して審査を受けた(校正刷審査)。

以上が、本稿で取り上げた実教出版『高校世界史』白表紙本に関わる検定の流れとなる。

5. 実教出版『高校世界史』白表紙本(第1回)に対する不合格

前項で述べた制度のもとで実教出版『高校世界史』に対する検定が実施された。1979

²⁴ 文部省初等中等教育局『昭和五十二年三月 現行教科書制度の概要』文部省、1977年、6～7頁。

²⁵ 前掲「教科用図書の検定申請原稿の調査評定および合否判定に関する内規」第一。

²⁶ 同上。

²⁷ 大槻健・尾山宏・徳武敏夫編『教科書黒書』労働旬報社、1969年、156～157頁。

²⁸ 前掲「教科用図書の検定申請原稿の調査評定および合否判定に関する内規」第一。

²⁹ 同上。

年度用のために 1977 年度に文部省に提出された原稿（実教出版『高校世界史』白表紙本（第 1 回））は、1977 年 9 月に不合格となった。このときの不合格を通告した書類は、鈴木亮の著書に紹介されている。以下のような文面であった（下線は引用者による）。

昭和五十四年度用教科用図書として検定申請の高等学校世界史第一～三学年用原稿は、教科用図書検定調査審議会の答申に基づき下記理由により不合格と決定されましたのでご通知いたします。

なお、この決定について不服があるときは、この決定があったことを知った翌日から六十日以内に、文部大臣に対して行政審査不服法に基づく異議申立をすることができます。

記

本原稿は正確性と表記・表現に著しい欠陥があり、内容の程度、内容の選択と扱い、組織・配列・分量にも不適切な点が多く、高校世界史教科書として不合格と判定する。

文部省初等中等教育局長 諸澤正道³⁰

下線部にあるように、不合格の理由は文書では教科用図書検定基準の用語を列挙して抽象的に提示されるだけで、具体的に問題となった個所や評点などははっきりと伝えられることはなく、前述のように原則 60 分以内の口頭での説明がなされるのが通常であった。執筆者たちは急遽「七十五日以内」という期日のもとで修正作業に入り、1977 年 12 月に再提出を行なった³¹。それが実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）となる。

6. 実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）に対する「条件付き合格」

6-1. 「条件付き合格」の「条件」の提示

1977 年 12 月に提出した実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）は「条件付き合格」となり、1978 年 2 月末の 2 日間にわたって、執筆者 7 名と編集者が文部省で「条件」の提示を受けた。2 月 27 日は 10 時 30 分頃から、昼食休憩をはさんで、19 時過ぎまで、2 月 28 日は 10 時から 13 時過ぎまでかかった³²。

この「条件」提示のときにおいて録音はなされなかった³³。ただし、執筆者の書き

³⁰ 鈴木亮『大きなうそと小さなうそ—日本人の世界史認識—』ほるぷ出版、1984 年、230 頁。

³¹ 同上、231 頁。

³² 同上、236 頁。

³³ 同上（229 頁）には教科書調査官から録音はしないようにという要望があったことが記載されている。制度上、録音は可能であったが、このときに録音をしなかったことは、二谷貞夫氏への聞き取り

たものの中に教科書調査官の「条件」に関わる発言が記載されている。特に、鈴木亮の著作に一部のやり取りの詳細が紹介されており³⁴、実教出版『高校世界史』の教師用指導書の各所にも紹介されている³⁵。また、実教出版『高校世界史』とは明示されていないが、他の世界史教科書への検定意見とともに、出版労連発行の刊行物にも紹介されている³⁶。本稿で取り上げた二谷貞夫所蔵の実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）に記載されたメモは、このときの「条件」等を記録したものである。

鈴木亮によれば、教科書調査官から開口一番に「まったくのすれすれの合格」であり、「非常に意見がたくさんついて」いること、「直しは徹底的に直してもらいたい」旨を言われたという³⁷。

6-2. 二谷メモについて

二谷貞夫所蔵の実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）への書き込みについて述べる。本稿では二谷貞夫氏が書き込んだメモを「二谷メモ」と呼ぶこととする。書き込まれたメモには、編集のメモと検定条件のメモの2種類がある。

まず、編集のメモには2種類がある。第一に、二谷氏本人が記載したものである。これは二谷氏が編集や修正に関わって検討もしくは気付いた点の記載であり、執筆者の分担の記載なども含まれる。第二に、編集担当者による記載と推測されるものである。これは、ルビや生没・在位・在任の年の修正などが該当する。

そして、検定条件のメモがある。これは教科書調査官が提示した検定条件（「意見」）を二谷氏がその場で記載したものである。後述するように、全体の7割に及ぶページに検定条件が示されている。用語や文に丸印や下線、複数の行やページに括りや囲みを付けて、「意見」の内容を簡単に記し、「A」または「B」と付されているものが通常である。メモは基本的に簡潔なものであり、二谷氏本人への聞き取り³⁸と検定に関わる前述のその他の資料とを併せることで、このときの検定条件の内容を確認することができる。

（2018年5月26・27日、長野県茅野市）および鬼頭明成氏への聞き取り（2018年12月20日、電子メールによる）により確認した。

³⁴ 鈴木亮・前掲『大きなうそと小さなうそ』。特に、「第三章 文部省検定済教科書」を参照されたい。

³⁵ 実教出版編修部編・前掲『高校世界史 指導書』。

³⁶ 出版労連教科書対策委員会編『79教科書レポート』No. 23、日本出版労働組合連合会、1979年。本誌の「I 教科書検定はどのように行われた」の中に「高校社会科教科書に対する検定〔新検定規則適用以前〕」（16頁）、「高等学校世界史教科書に対する文部省の指示例」（22～25頁）などがある。

³⁷ 鈴木亮・前掲『大きなうそと小さなうそ』、228～229頁。

³⁸ 前掲「二谷貞夫氏への聞き取り」（2018年5月26・27日）および「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 二谷貞夫先生」（2017年8月20日・9月9日・10月14日、『歴史教育史研究』第16号、2018年12月）による。

6-3. 二谷メモに見る検定の状況

二谷メモを通して確認できる検定の状況は以下の通りである。非常に多くの数の検定条件の指示がなされている。二谷メモでの記載を、教科書レポートの「高等学校世界史教科書に対する文部省の指示例³⁹⁾」と併せて整理すると、全 326 頁（「はじめに」4 頁、本文〔扉を含む。索引を除く〕322 頁）のうち、226 頁に検定指示がなされている⁴⁰⁾。約 7 割に当たる。数え方は難しいが、概算では「A」が 210 か所、「B」が 208 か所、「A」・「B」が記載されていないが検定条件と判断できる記載が 54 か所、の合計 472 か所に及ぶ。

前述のように、検定条件のメモの基本は、該当箇所を示して教科書調査官の指示を簡潔に記載し、「A」または「B」と添えてあるものである。用語等を指定して「A」「B」と単に記されているものも散見される。一部に「A→B」という記載も見られる。これは二谷氏の説明によると、「A」と言われたものが執筆者と教科書調査官とのやり取りの中で「B」となったものである。「A」には「教科書調査官のA」と「覆面の人のA」（非常勤の氏名非公開の調査員のこと）とがあり、前者はくつがえることはないが、後者は「B」になることもあったという。教科書調査官にとって「覆面の人のA」を執筆者に伝えることで「覆面の人」（調査員）への義理を果たしたものでなかったかと二谷氏は推測している⁴¹⁾。一方で、「A」「B」の記載のないメモもある。条件が「A」であるのか、または「B」であるのかは、検定可否に関わり執筆者にとって非常に重要な点であった。記載時の漏れと考えられる箇所が確認できる一方で、教科書調査官が「A」「B」を明言しない例や「A」でも「B」でもないとして指示を出す例⁴²⁾などが当時において問題になっていたことを考慮すると注意すべき部分ではある。

6-4. 二谷メモに見る検定の内容

提示された条件の内容に関しては、単純な誤記載に対する指摘もあるが、「内容」「正確（性）」「表現」「程度」などと書かれての指示が多い。これは「4」で前述した「社会科の必要条件」の特に 1～6 に該当するものである。また、文頭への接続詞挿入の指示など、文章の細かい直しもある。

二谷メモの全体を見ると、修正を求められた個所には傾向がみられる。特に、従来の世界史教科書で取り上げられてきた西洋史や東洋史の内容ではない人物や出来事についての記述内容やその記述量に厳しい。「不要」と添えられているものが多い。日本

³⁹⁾ 前掲「高等学校世界史教科書に対する文部省の指示例」。

⁴⁰⁾ 同上の「指示例」等に記載があつて二谷メモに記載がないものもある。執筆や修正の分担の関係などが考えられる。

⁴¹⁾ 以上の説明は、前掲「二谷貞夫氏への聞き取り」（2018 年 5 月 26・27 日）。なお、「B→A」というメモもあるが、この事情は不明である。

⁴²⁾ 大槻健・尾山宏・徳武敏夫編・前掲『教科書黒書』（160～161 頁）など。

史の記述量の削減を求める例も目立つ。逆に、西ヨーロッパ史では追加の求めもある。これらは実教出版『高校世界史』の編集の意図に対する異議と見なすことができよう。また、他の歴史教科書検定でも見られた例と共通するものもある。例えば、社会主義国、特にソ連の記述の仕方に対して厳しい点、一方で近現代の日本の動きに批判的な記述に対して非常に厳しい点が挙げられる。鈴木亮はこのときの検定について「文部省史観」として「執筆者たちの考えていたことと、根本的に違っていた」と批判し⁴³、吉田悟郎は「文部省的歴史観」が「『外国史』としての世界史」であると批判している⁴⁴。具体的には稿末の資料「二谷貞夫所蔵「実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）」における検定の状況」を参照されたい⁴⁵。

6-5. 「日本の中国侵略」に対する「修正意見（A）」

表1を見て気付くように、節の題目が1か所「修正」されている。これは第4部「本史Ⅱ」の第2章「世界恐慌と第二次世界大戦」の第2節（§2）に当たる。題目が実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）では「日本の中国侵略と抗日運動」（264頁）であったのが、実教出版『高校世界史』供給本では「日本の中国侵入と抗日運動」（259頁）となっている。

二谷メモでは「侵略」を丸で囲んで、そこから線を引いて「A」と書き込まれている。その右に、同様に線を引いて「侵入」「進出」と書いてあり、「進出」のほうを消してある。

この修正意見について記した初出は、1979年1月発行の『教科書レポート』である。そこには、教科書名や出版社名は伏せた形で次のように書かれている。

●「日本の中国侵略」→①まずい。「侵略」は進出あるいは侵入とせよ。⁴⁶

1984年10月発行の鈴木亮『大きなうそと小さなうそ』では、このときのやり取りを次のように詳しく記載している。

⁴³ 鈴木亮・前掲『大きなうそと小さなうそ』、239～240頁。ここで鈴木は「文部省の方針」を、①日本のおこなった侵略的・帝国主義的行為については、書かないでおくか、できるだけ目立たぬように書く、②世界史に日本の記述は必要がない、③現代は歴史ではない、④ベトナム・朝鮮などアジアのこと、アフリカ、中南米、中東あるいはイスラム世界、太平洋、東ヨーロッパ、北方ユーラシアのことなどは、あまり書く必要はない、⑤西ヨーロッパのことは、いままでの西洋史の型どおりを書いておかねばならない、と5つにまとめている。

⁴⁴ 吉田悟郎「『外国史』としての世界史—文部省的歴史観の輪郭—」社会科教科書執筆者懇談会編『教科書問題とは何か』未来社、1984年。本書には、鈴木亮「『よい』検定」と大江一道「戦争記述」も収録されている。

⁴⁵ 稿末資料は紙幅の関係で前半（今号掲載）と後半（次号掲載）とに分けて掲載する。

⁴⁶ 前掲「高等学校世界史教科書に対する文部省の指示例」（前掲『79教科書レポート』No. 23、24頁）。

「日本の中国侵略ということばはまずい。シンシュツとかシンニュウとかいうことばにしてもらいたい。表現の A です」

「表現 A」とは、表現のしかたがわるいから必ず直せ、修正意見だということである。

ずっとだまって条件指示を聞いていた執筆者も、ここでは思わず口をはさんだ。

執筆者「欧米では問題になりますよ」

調査官「しかし他の国のばあいは侵略ということばをつかってないですね。たとえばロシアが侵略したとか」

執筆者「つかってますよ。ロシアが中央アジアに侵略したとか」

執筆者「シンニュウは侵す入る、でいいんですか」

調査官「えー、そのへんだったら手をうつというやつですね」

かくて、〈日本の中国侵略と抗日戦争〉という見出しは、〈日本の中国侵入と抗日戦争〉となった。…⁴⁷

本稿で取り上げた実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）は、これらの記述に関わる一次史料となる。

7. まとめにかえて ―資料を見る視点―

「はじめに」で述べたように、以下の資料において、実教出版『高校世界史』白表紙本（第 2 回）に対して口頭で指示された教科書調査官による「条件」を、二谷貞夫所蔵本に記載されたメモ等を通じて確認し、それを示した。そして、この資料の背景となる実教出版『高校世界史』の意図、検定の制度、その制度下での「条件」提示の様子などを、これまで取り上げてきた。ここで、資料を見る視点を示すことでまとめにかえたい。

第一に、新たな世界史教科書の試みが受けた妨げとして捉える視点である。1970 年代後半にこのような世界史教科書が試みられたことの意味、そしてそれが検定により修正を余儀なくされたことの意味を考えていく必要がある。さらに、発行された教科書が世界史教育にもたらした影響、および逆に揺るがなかった世界史教育（世界史教師）という問題も議論となる。世界史教育実践としての実教出版『高校世界史』の位置を、1970 年代後半という時代のみならず現在までの約 70 年に及ぶ世界史教育史の中で再検討していくことは、今後の高校での歴史教育の検討に重要な示唆を与えるものとなろう。

⁴⁷ 鈴木亮・前掲『大きなうそと小さなうそ』、242 頁。なお、鈴木は、1982 年の教科書問題が起こった後に新聞記者が教科書調査官であった人物に取材した報道も引用している（『朝日新聞』1982 年 9 月 10 日）。

第二に、教科書検定の実態を示す資料として捉える視点である。当時において批判されていた密室での検定の実態の一端を示す貴重な情報である。特に文部省の「侵略」記載への対応を含めて、1970年代後半における特定の社会科教科書検定の全体を示すものとなっている。さらには、この資料の限界に考慮しつつ⁴⁸、戦後の検定教科書制度の始まりから現在の検定教科書制度に至るまでの歴史的展開に位置づける必要がある。

附記

貴重な資料や情報を提供された二谷貞夫氏・鬼頭明成氏をはじめ資料収集にご協力を賜った方々に厚く御礼を申し上げます。

⁴⁸ この資料の限界とは、白表紙本への検定のみでは分からない部分が存在する点である。当時の言論をみると、白表紙への検定（教科書調査官・調査員から執筆者・編集者へ）よりも内閣本をめぐる検定（教科書調査官から編集者へ）のほうが密室性が高く、問題点が多いとも指摘されている。

資料：二谷貞夫所蔵「実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）」における 検定の状況（前半）

凡例

1. 本資料は「実教出版『高校世界史』白表紙本（第2回）」（以下、白表紙本）での二谷貞夫による書き込みを中心に作成した。この書き込みは1978年2月27日と28日に教科書調査官から提示された「検定意見」のメモである。
2. 掲載の基本は次の通りである。なお、(4)は記載がある場合のみ掲載した。
 - (1) 白表紙本の該当頁および該当箇所の小見出し・図表等の題名。
 - (2) 白表紙本での該当箇所の記載。特に関連する箇所に二重下線を引いた。
 - (3) 白表紙本での二谷貞夫による書き込み。「二谷メモ」と記す。必要に応じて、鈴木亮『大きなうそと小さなうそ』（ほるぷ出版、1984年）での記述で補足した。「鈴木亮」と記す。
 - (4) 「高等学校世界史教科書に対する文部省の指し例」（「教科書検定はこのように行われた」『79教科書レポート』日本出版労働組合連合会、1979年1月、22～25頁）での記載。「レポート」と記す。
 - (5) 供給本（吉田悟郎ほか『高校世界史』、実教出版、1978年3月31日検定、1979年1月25日発行）での該当頁および(1)と異なる場合のみ該当箇所の小見出し・図表等の題名。
 - (6) 供給本での該当箇所の記載。特に修正などがなされた箇所に下線を引いた。
3. 白表紙本・供給本の本文の上下に記載されたルビ、生没年や在位・在任年などは、特に検定に関わるものを除いて基本的に省略した。
4. 白表紙本に見られる編集に関わる書き込みは、記載を省略した。
5. 供給本では「二谷メモ」等で記された箇所以外でも変更されている例があるが、本資料では白表紙本で確認できる「二谷メモ」等で記された箇所に限定した。
6. 『高校世界史』は全4部で構成されており、第1部・第2部を「前半」として今号（第17号）に掲載し、第3部・第4部は「後半」として次号（第18号）に掲載する。

はじめに

白表紙本「はじめに」3頁（地域区分）

そこでこの教科書では、地球的全世界を構成している地域世界として、九つの地域世界を設定することにした。

二谷メモ：「明確でない」「A → B」の書き込み。

供給本「はじめに」3頁

そこでこの教科書では、地球的全世界を構成している地域世界として、それぞれの個性と問題にそくして、九つの地域世界を設定することにした。

白表紙本「はじめに」4頁（時代区分）

すなわち、各地域世界が一つの世界として動きはじめた時期を13世紀半ばにおき、それ以前の時期を世界史の前史とみて、「第1部 前史」とした。

二谷メモ：「前史」に○をつけて「先史」「まずい」「本史」「A → B」の書き込み。

供給本「はじめに」4頁

すなわち、各地域世界が一つの世界として動きはじめた時期を13世紀半ばにおき、それ以前の時期を世界史成立の前史とみて、「第1部 前史」とした。

第1部 前史

白表紙本3頁（脚注①）

出土品のうち、玉はクンルン（崑崙）山脈のふもとから、象牙は雲南から、ウミガメの甲やコヤスガイは南方の島から、動物文様の青銅製小刀や斧はイランや北方ユーラシアから、それぞれはこばれたと思われる。

二谷メモ：（なし）

レポート：⑧実証できるか。できなければ学界の定説を書け。教科書は定説を書くので、他はひかえてほしい。

供給本 3 頁
（変更なし）

白表紙本 4 頁（黄河中流域の文化と政治）

前 1100 年ころ、商は、西方や北方との交易の拠点である渭水地域におこった周によってたおされた。

二谷メモ：（なし、ただし黒ボールペンで「前 1100 年ころ」が「前 11 世紀ころ」に修正）

レポート：④開拓で力を養った農業国家が一般的。ふつうの考え方をもってもらいたい。

供給本 4 頁

前 11 世紀ころ、殷は、黄河の支流の渭水地域におこった周によってたおされた。渭水の流域ははやくから農耕が発達しており、西方や北方との交易の拠点でもあった。

白表紙本 5 頁（東アジアの変動）

そのころ、戦国時代の燕・斉・趙などと対抗して、朝鮮半島の西北部に王国が成立した（古朝鮮）。

二谷メモ：（なし）

レポート：④「対抗して」はおかしい。無理がある。それだけの力があつたかどうか。

供給本 5 頁

そのころ、戦国時代の燕・斉・趙などに刺激されて、朝鮮半島西北部にも王国が成立し、古朝鮮とよばれた。

白表紙本 14 頁（脚注①）

大和政権は百済の再興のために援軍を送ったが、663 年、白村江の戦いで大敗した。

二谷メモ：「大和政権」に○をつけて「日本としては」の書き込み。

供給本 14 頁
（変更なし）

白表紙本 15 頁（新羅・渤海）

渤海は、唐を模範として国制をととのえ、大和政権とも交流した。

白表紙本 15 頁（大和政権と東アジア）

百済と高句麗の滅亡は、大和政権にも大きな影響をあたえた。

二谷メモ：「大和政権」に○をつけて「日本」の書き込み。

供給本 15 頁

（変更なし）（「大和政権と東アジア」の小見出しは「東アジアと日本」となっている）

白表紙本 15 頁（大和政権と東アジア）

遣唐使の派遣は、大和政権の財政難や渡航の危険などから、894 年に廃止されたが、新羅・渤海との交流は、なおさかんにつづけられた。

二谷メモ：「大和政権」に○をつけて「日本」「AA」の書き込み。

レポート：④大和政権は 4～7 世紀の日本をさすので不適當。日本といえ。

供給本 15 頁（東アジアと日本）

遣唐使の派遣は、財政難や渡航の危険などから、894 年に廃止されたが、新羅・渤海との交流はなおさかんにつづけられた。

白表紙本 16 頁 (唐末五代)

10 世紀中ごろ、呉越は使節を日本にひんばんに送り、孔雀・香物・絹織物・暦本などをもたらした。

二谷メモ：「10 世紀中ごろ」の前に「<」をつけて「不要」の書き込み。また、「もたらした」を四角で囲み、「逆の表記ではないか」「A→B」と書き込み。

レポート：㊸不要ではないか。「もたらした」とは立場が逆。

供給本 16 頁

(削除)

白表紙本 20-21 頁 (儒仏道 3 教の発展)

字句のさまつな解釈に終始していた儒学(訓詁の学)は、仏教の影響をうけて、宇宙の原理や人間の本性を哲学的に探求するようになった(宋学)。

二谷メモ：「さまつな」に○をつけて、「不要」「森鷗外 渋江ちゅさい」(渋江抽斎)と書き込み。

供給本 20 頁

字句の解釈に終始していた儒学(訓詁の学)は、仏教の影響をうけて、宇宙の原理や人間の本性を哲学的に探求するようになった(宋学)。

白表紙本 21 頁 (儒仏道 3 教の発展)

とくに全真教は、戒律・修行を重んじて、儒仏道 3 教の融和をはかり、ひろく民衆の心をとらえていった。

二谷メモ：「全真教」に○をつけて、「華北・金で発達した」「内容」「A」と書き込み。

供給本 21 頁

とくに華北にうまれた全真教は、仏教の影響をうけ、戒律・修行を重んじて、儒仏道 3 教の融和をはかり、ひろく民衆の心をとらえていった。

白表紙本 27 頁 (諸王国の発展)

前 3 世紀ころ、南インドのドラビダ族のなかからサータバーハナ朝がおこり、前 2～1 世紀にデカン高原でさかえた。

二谷メモ：「サータバーハナ朝」に○をつけて、「アーンドラ国の方」「B」と書き込み。

レポート：㊸他の教科書はアーンドラ朝だ。その方がベターだ。

供給本 27 頁

前 3 世紀ころ、南インドのドラビダ族のなかからサータバーハナ朝 (アーンドラ朝)がおこり、前 2～1 世紀にデカン高原でさかえた。

白表紙本 28 頁 (グプタ朝とその文化)

…、『カターサリットサーガラ』などの説話文学の原形がうまれ、…

二谷メモ：「カターサリットサーガラ」に○をつけて、「不要」と書き込み。

レポート：㊸不必要。

供給本 28 頁

(削除)

白表紙本 28 頁 (『カターサリットサーガラ』についての脚注④)

11 世紀ころにソーマデーバによって完成され、今日でも親しまれている説話文学集で、インドの説話文学は、アラビアの『千夜一夜物語』や日本の平安末期の『今昔物語集』にも影響をあたえている。

二谷メモ：(なし)

レポート：㊸『今昔物語集』に直接の影響をあたえているみたい。もう少し軽くするような表現を。

供給本 28 頁

(削除)

白表紙本 29 頁 (ヒンズー社会の成立)

…、職業・信仰・種族・経済力の違いにもとづく社会集団 (ジャティ) がつくりだされていた。

二谷メモ：以降 2 か所の「ジャティ」に○をつけて、「カースト」「B」と書き込み。

供給本 29 頁

…、職業・信仰・種族・経済力などの違いにもとづく社会集団 (カースト) がつくりだされていた。(合計 4 か所の「ジャティ」を「カースト」に変更)

白表紙本 38 頁 (ギリシア人の西アジア侵入)

この文化はヘレニズム文化ともよばれ、またこれらの諸王国はヘレニズム王国ともよばれる。

二谷メモ：「ヘレニズム文化」「ともよばれ」「ヘレニズム王国」「よばれる」に○をつけて、「定着している」と書き込み。

供給本 37 頁

この文化はヘレニズム文化とよばれた。

白表紙本 39 頁 (イスラム教の成立)

メッカの商人マホメット (ムハンマド) は、アッラー (神) の啓示をうけ、アッラーに絶対帰依するイスラム教をひらいた。

二谷メモ：「ムハンマド」に○をつけて、「必要なし」「B」と書き込み。

レポート：㊸ () 内不必要。

供給本 39 頁

メッカの商人マホメットは、アッラー (神) の啓示をうけ、アッラーに絶対帰依するイスラム教をひらいた。

白表紙本 40 頁 (地図「イスラム世界の発展」題目)

二谷メモ：「いつごろの地図か」「B」と書き込み。

供給本 40 頁

イスラム世界の発展 (7～8 世紀)

白表紙本 42 頁 (東方イスラム世界の文化)

イランのフィ尔多ウシーは、イラン人の伝説と歴史の叙事詩『王書』を書き、…

二谷メモ：「フィ尔多ウシー」「王書」に○をつけて、「不要」「B」と書き込み。

レポート：㊸ 不必要。

供給本 42 頁

(変更なし)

白表紙本 42 頁 (後ウマイヤ朝)

また学芸が重んじられ、歴史家イブン=ハイヤーンや、精神的恋愛詩『鳩の首輪』を書いたイブン=ハズムなどがあらわれた。

二谷メモ：「イブン=ハイヤーン」「鳩の首輪」「イブン=ハズム」に○をつけて、「不要」「B」と書き込み。

供給本 42 頁

また学芸が重んじられ、文芸では、恋愛詩『鳩の首輪』を書いたイブン=ハズムが名高い。

白表紙本 43 頁 (地図「ムスリム商人の活躍」)

(各地の貿易品を○で囲み、交易路を結んだ地図)

二谷メモ：「○ ○ 結びつき」「→ 方向か」「B」と書き込み。

供給本 43 頁 (地図「ムスリム商人の活動 (9～11 世紀)」)

(地図表題の変更。○囲みの貿易品が削除され、交易路が実線で示された地図に変更)

白表紙本 44 頁 (セルジューク・トルコ)

セルジューク朝は、農地を封地として軍人にあたえて社会を安定させ、ニザーミア大学の設立など文化の発展にも力をいれ、イラン-イスラム文化を開花させた。

二谷メモ：「ニザーミア大学」に○、さらに「大学」に○を付け、「学院」「A→B」と書き込み。

供給本 44 頁

セルジューク朝は、農地を封地として軍人にあたえて軍制を確立し、王権を安定させた。ニザーミア学院の設立など文化の発展にも力をいれ、イラン-イスラム文化を開花させた。

白表紙本 44 頁 (セルジューク・トルコ)

神学者のアッガザリーや、天文学・数学・医学者で詩人でもあるウマル=ハイヤームは名高い。

二谷メモ：「アッガザリー」「ウマル=ハイヤーム」に○を付け、「不要」と書き込み。

レポート：㊸不必要。

供給本 44 頁

(変更なし)

白表紙本 45 頁 (十字軍との戦い)

サラディン (サラフッディーン) は、おとろえたファーティマ朝にかわってスンナ派のアイユーブ朝をたて、ムスリム勢力を統合して十字軍国家を包囲し、1187 年、エルサレムを解放した。

二谷メモ：「サラフッディーン」に○を付け、「不要」「B」と書き込み。

レポート：㊸まずい。公平でない。回復か。

供給本 45 頁

サラディンは、おとろえたファーティマ朝にかわってスンナ派のアイユーブ朝をたて、ムスリム勢力を統合して十字軍国家を包囲し、1187 年、エルサレムを回復した。

白表紙本 45 頁 (モンゴルとエジプト)

イル汗国をたてたフラグは、農業や商業を振興し、ムスリム・ユダヤ教徒・キリスト教徒に寛大な政策でのぞみ、かれらの支持をえた。またマムルーク朝との対抗上、積極的に西ヨーロッパ諸国に接近し、1287 年、ネストリウス派キリスト教司祭のラバン=サウマを、ローマ教皇やイギリス・フランス国王のもとへ派遣したりもした。

二谷メモ：欄外で1段落くくって「P83 との関係」「参照頁」と書き込み。

供給本 45 頁

(変更なし、ただし「キリスト教」の参照ページが削除)

白表紙本 54 頁 (4 世紀の帝国)

330 年には、首都をローマからキリスト教徒の多い東方のビザンチウム (コンスタンチノーブルと改称) に移し、帝国の重心は東方に移った。

二谷メモ：(なし)

レポート：㊸多いから移ったのではなく、安定しているからである。

供給本 54 頁 (4 世紀の帝国とキリスト教)

330 年には、首都をローマから東方のビザンチウム (コンスタンチノーブルと改称) に移したので、帝国の重心は東方に移った。

白表紙本 56 頁 (アラブ勢力の進出)

また 8 世紀以来、ローマ公教会がフランク王国とむすんでローマ皇帝の統制からはなれ、東方教会は、ギリシア正教会とよばれるようになった。

二谷メモ：「ローマ皇帝」に○を付け、「東」「B」と書き込み。

供給本 56 頁（東ローマ帝国とアラブ勢力）

また 8 世紀以来、ローマ公教会（カトリック）がフランク王国とむすんで東ローマ皇帝の統制からはなれ、東方教会は、ギリシア正教会とよばれるようになった。

白表紙本 58 頁（ポーランド）

マジャール人の出現は、西スラブのポーランド人に強い刺激をあたえた。かれらの間に、南方のモラヴィア王国にならった国家形成の動きがはじまり、10 世紀後半には、ピャスト朝がおこった。この王朝の始祖 ミエシュコ 1 世は、ローマ公教に改宗するとともに、国内の制度をととのえ、ビスツラ川・オーデル川方面にも進出した。

二谷メモ：「ピャスト朝」「ミエシュコ 1 世」に○を付け、「不要」と書き込み。

供給本 58 頁

マジャール人の出現は、西スラブのポーランド人に強い刺激をあたえた。かれらの間に、南方のモラヴィア王国にならった国家形成の動きがはじまり、10 世紀後半には、最初の王国がうまれた。国王ミエシュコ 1 世は、ローマ公教に改宗するとともに、国内の制度をととのえ、ビスツラ川・オーデル川方面にも進出した。

白表紙本 58-59 頁（キエフ・ロシア）

9 世紀から、スカンジナビア半島のノルマン人（ワリヤーク）がこの水路に進出して、ビザンツ帝国との交易をはじめるとともに、中流域に住む東スラブ人を支配下においた。なかでもノブゴロド公国は有力で、9 世紀末にはオレーグ公が、キエフ地方のスラブ人をおさえてキエフ公国をたてた。

二谷メモ：「オレーグ公」に○。

供給本 58 頁

9 世紀から、スカンジナビア半島のノルマン人がこの水路に進出して、ノブゴロド公国をたて、ビザンツ帝国との交易をつうじて発展した。さらに 9 世紀末には、キエフ地方のスラブ人をおさえてキエフ公国をたてた。

白表紙本 60 頁（脚注①）

東ローマ帝国では、842年に教会が勝利をおさめ、…

二谷メモ：「842」に○を付け、「843 ではないか」と書き込み。

供給本 60 頁

東ローマ帝国では、843年に教会が勝利をおさめ、…

白表紙本 61 頁（北・西ヨーロッパ）

北ゲルマンのノルマン人は、8 世紀末ころ、スウェーデン・ノルウェー・デンマルクなどの王国をたてた。

二谷メモ：「デンマルク」に○を付け、「ダンマルク デンマルク デンマーク」「A」と書き込み。

供給本 60 頁

北ゲルマンのノルマン人は、8 世紀末ころ、スウェーデン・ノルウェー・デンマークなどの王国をたてた。

白表紙本 63 頁（ビザンツ帝国の周辺）

…、バルカン地方では、領土を拡大し、経済・文化も豊かであった。しかし、11 世紀後半以来、東方からセルジューク・トルコ、北方からトルコ系のペチェネグ、西方からノルマンの圧迫が加わった。

二谷メモ：「ペチェネグ」に○を付け、「不要」と書き込み。

供給本 63 頁

…、バルカン地方では、領土を拡大し、経済力も豊かで、文化もさかえた。しかし、11 世紀後半以来、東方からセルジューク・トルコ、北方からトルコ系のペチェネグ、西方からノルマ

ンの圧迫が加わった。

白表紙本 66-69 頁 (第 5 章 アフリカ世界)

二谷メモ：白表紙本 67 頁の欄外に「これだけのスペース」と書き込み。「鈴木亮」(249 頁)には、「アフリカ世界についてこれだけのスペースをさいて記述する必要があるだろうか。」という指摘があります。これは A でも B でもありませんが」と言われたとある。

供給本 66-69 頁

(全 4 頁の「第 5 章 アフリカ世界」の「スペース」には変更なし)

白表紙本 67 頁 (アフリカの自然と農耕・牧畜のはじまり)

サハラ地域は、前 8000 年から前 2000 年ころは、サバンナ植物におおわれ、狩猟や牧畜がおこなわれていたが、前 500 年ころまでには乾燥化がすすんで砂漠となった。

二谷メモ：(なし)

レポート：④歴史と無関係。いらない。

供給本 67 頁

(削除)

白表紙本 72 頁 (太平洋の島じまと移住のはじまり)

2〜3 万年前ころから、東南アジアからニューギニアやオーストラリアへの移住がおこなわれ、約 5000 年前ころからは、中国南部や東南アジアからポリネシア・ミクロネシアへの移住がはじめられ、タロイモ・バナナなどの栽培技術や、ぶた・にわとりなどの家畜が太平洋諸島へもたらされた。また、オーストラリアでは狩猟生活がつづけられた。

二谷メモ：「2〜3 万年前ころから」に○を付け、「移動の主体」「A」「あつかい」「どのような人種」と書き込み。

供給本 72 頁

オーストラリア大陸には、東南アジアから移動したと考えられる狩猟民が、狩猟生活をつづけていた。数千年前ころになると、東南アジアや中国南部から、農耕民がミクロネシア・メラネシアへ移動をはじめ、タロイモ・バナナなどを栽培し、ぶた・にわとりなどを飼育した。

白表紙本 72-73 頁 (太平洋世界の形成)

太平洋地域への移住は、前 1000 年ころまでにはフィジー・トンガ諸島におよび、そこをへて前 300 年ころサモア諸島へひろがった。その後、紀元 300 年ころには、マルケサス諸島にいたり、ここを起点として、500 年ころ、ハワイ諸島・イースター島へ、さらに 10 世紀ころにはニュージーランドへの移住がおこなわれた。そのころすでにニュージーランドには、マルケサス諸島からタヒチ島をへて移住した、ポリネシア系マオリ族が住んでいたと思われる。これらの移住者によって、太平洋地域にも共通した文化がつくりだされた。

かれらは、島での農耕だけでなく、カヌーをつくってたくみにあやつり、狩猟・漁撈や自然物の採集によって自給自足の生活をいとなんだ。星・風・海流などの性格を熟知し、これらすべてに神がやどると信じた。

二谷メモ：(なし)「鈴木亮」(248 頁)には「確かか。確定できるのか。ここまで書く必要があるのか。扱いの A。不確かなものはきりすてよ」と言われたとある。

レポート：(8 行分) ④年代たしかか。確定できるか。ここまで書く必要あるか。

供給本 72-73 頁

太平洋地域への民族の移動は、10 世紀ころまでつづけられた。前 1000 年ころまでにはフィジー・トンガ諸島におよび、さらにサモア諸島へひろがった。その後、紀元 300 年ころには、マルケサス諸島にいたり、ここを起点として、ハワイ諸島・イースター島へ、さらに 10 世紀ころにはニュージーランドへの移動がおこなわれた。ニュージーランドには、マルケサス諸島からタヒチ島をへて移動した、ポリネシア系マオリ族が住んでいた。これらの海洋民によって、太平洋地域にも共通した文化がつくりだされた。

かれらは、農耕だけでなく、さまざまな漁撈文化をうみだした。また、星・風・海流など

の性格を熟知し、海洋についての知識を深め、独自の航海技術を発達させた。

白表紙本 76-81 頁 (§ 2.北方ユーラシア世界の展開)

二谷メモ：(なし)

レポート：(約 5 頁分) ④固有名詞多い。大幅に整理せよ。1 頁に 10 以上も名詞がでている。

供給本 76-80 頁

(「§ 2.北方ユーラシア世界の展開」は約 1 頁分を減らして、以下の 4 項目を含めて全体的に修正が加えられている)

白表紙本 76-77 頁 (スキタイと匈奴)

…、インド-ヨーロッパ語族に属していたと思われるスキタイ人が、黒海・カスピ海の北岸で勢力をふるい、…

二谷メモ：(なし)「鈴木亮」(212 頁)には「思われるというような不確かなことは、書かないでほしい」と指示されて削除したとある。

レポート：④不確かなことは書くな。

供給本 76 頁

…、スキタイ人が、黒海・カスピ海の北岸で勢力をふるい、…

白表紙本 78 頁 (フン・エフタル・鮮卑・柔然・突厥)

これは、北方ユーラシア出身の支配者による漢民族支配であり、北魏は、やがて隋・唐にもうけつがれていく独特の胡風の文化、新しい統治制度をつぎつぎと試みていった。

二谷メモ：「胡風」に○、「の文化」に下線を付し、「表現」「B」と書き込み。

供給本 78 頁

これは、北方ユーラシア出身の支配者による漢族支配であった。

白表紙本 80 頁 (中央ユーラシアのトルキスタン化 [☆のうち])

ついで 10 世紀には、トルコ系のカルルク人が、ウイグルとともにタリム盆地を中心にカラハン朝をたて、中央ユーラシアのトルコ化をさらにすすめた。

二谷メモ：小見出しの「ユーラシア」に○をつけ「アジア」と書き込み。また、「カルルク人」に○をつけ「不要」「B」と書き込み。

供給本 79 頁 (中央アジアのトルキスタン化)

ついで 10 世紀には、トルコ系の一勢力が、ウイグルとともにタリム盆地を中心にカラハン朝をたて、中央アジアのトルコ化をさらにすすめた。

白表紙本 81 頁 (ハザールとペチェネグ)

ドン川・ボルガ川流域で、7~10 世紀にさかえたトルコ系騎馬民族のハザール国の住民は、…。9 世紀ころからカスピ海北辺におこったトルコ系騎馬民族のペチェネグは、10 世紀ハザール国に侵入し、11 世紀以降、黒海北辺からワラヒア・モルドーバに進出した。

二谷メモ：小見出しの「ハザールとペチェネグ」、「ハザール国」に○をつけ「全体きる」「B」と書き込み。

レポート：(8 行分) 全体削除でよい。

供給本 80 頁

ドン川・ボルガ川流域で、7~10 世紀にさかえたトルコ系騎馬民族のハザール国の住民は、…。9 世紀ころからカスピ海北辺におこったトルコ系騎馬民族のペチェネグは、10 世紀ハザール国に侵入し、11 世紀以降、黒海北辺から西方に進出した。

白表紙本 82 頁 (モンゴル帝国の形成)

テムジン(成吉思汗)は、1206 年、部族長会議(クリルタイ)に推されて皇帝(汗)となり、…

二谷メモ：「皇帝(汗)」に○をつけ「皇帝=汗でない」「A」と書き込み。

供給本 81 頁

テムジンは、1206 年、部族長会議（クリルタイ）に推されて汗となり、…

白表紙本 84 頁（文化の交流）

13 世紀半ばに、イタリアのプラノ=カルピニ、フランスのルブルック（リュブリュキ）らフランチェスコ会修道士がモンゴルをおとずれ、…

二谷メモ：「リュブリュキ」に○をつけ「不要」「B」と書き込み。

供給本 81 頁

13 世紀半ばに、イタリアのプラノ=カルピニ、フランスのルブルックらフランチェスコ会修道士がモンゴルをおとずれ、…

第2部 本史 I（1）

白表紙本 88 頁（世界史の一体化のはじまり―「本史」を学習するにあたって―）

13 世紀にイラン・トルコ両勢力にかわり、モンゴルがユーラフロアジア（ヨーロッパ・アフリカ・アジア）世界をかけめぐった。

二谷メモ：「ユーラフロアジア」に下線をつけ「B」と書き込み。

供給本

（削除）（白表紙本 88-89 頁の「世界史の一体化のはじまり―「本史」を学習するにあたって―」は供給本では全面削除されている。白表紙本 88-89 頁については以下同じ）

白表紙本 88 頁

モンゴルの世界征服にたいする諸地域の対応、それにたいするモンゴルの逆対応、という動きのなかで、それまで個々別々に存在していた地域世界が、共通の問題を中心にむすびあう状態がでてきた。ここにユーラフロアジア世界というものがはじめてできあがってくる。

二谷メモ：全体をくくって「モンゴルの過大評価」「A」と書き込み。

供給本

（削除）

白表紙本 88 頁

グルジアをめぐるイル汗国と抗争したモンゴルのキプチャク汗国は、…

二谷メモ：「グルジア」に下線をつけ「B」と書き込み。

供給本

（削除）

白表紙本 88 頁（脚注①）

蒼穹としての天が、…

二谷メモ：「蒼穹」に○をつけ「むづかしい」と書き込み。

供給本

（削除）

白表紙本 89 頁

二谷メモ：欄外に「223-230 一体化理解 こんなん B」と書き込み。

白表紙本 89 頁

…、世界政治という理念をふくむこの世界宗教にささえられた政治力・軍事力をもって、3 世界はぶつかりあったのである。

二谷メモ：「世界政治という理念をふくむこの世界宗教」に下線をつけ「モンゴル」「世界宗教」「A」「正確」と書き込み。

供給本

(削除)

白表紙本 89 頁

モンゴル勢力の世界征服と世界帝国の樹立によって、はじめてアジアとヨーロッパとアフリカをつなぐ広大な経済圏・文化圏がつくりあげられた。

二谷メモ：「イスラムをいれて」「B」と書き込み。

供給本

(削除)

白表紙本 89 頁

アメリコ・オセアニア（アメリカ・オーストラリア・太平洋）世界をふくむ地球的全世界を対象とした政治的、経済的、文化的支配の道をもとめはじめ。

二谷メモ：「アメリコ・オセアニア」に下線をつけ「一般化している」「B」と書き込み。

供給本

(削除)

白表紙本 90 頁（元朝の成立と東アジア）

フビライは、高麗をなかだちとして日本に国書を送り、国交と通商をもとめたが、…

二谷メモ：「国交と通商をもとめた」に下線をつけ「無理」「A」と書き込み。「鈴木亮」（255 頁）では「要するに服属し朝貢せよということだから、国交と通商をもとめたのではない」ときめつけて修正意見 A をつけたとある。

供給本 88 頁

フビライは、高麗をなかだちとして日本に国書を送り、国交と通商を強要したが、…

白表紙本 90 頁（元朝の成立と東アジア）

いっぽう元は、1257 年につづいて 1284 年・1287 年にはベトナムに遠征したが、チャン朝（陳朝）のチャン＝フンダオ（陳興道）の指揮するベトナム軍に撃退された。ベトナムでは、このチャン朝のもとで政治制度がととのえられ、仏教とともに儒教が重んじられた。この時代に、漢文によるベトナムの歴史書『大越史記』が編さんされ、また、漢字をもとにした独自の文字チュノムが使われるようになった。

二谷メモ：全体をくくって「くわしすぎるのではないか」「B」と書き込み。「鈴木亮」（246 頁）では「ベトナム史についてくわしすぎる。ベトナム史をそんなに詳しく書く必要があるのか」と指摘されたとある。

供給本 88 頁

(変更なし)

白表紙本 90 頁（脚注①）

江華島防衛の主力部隊であった三別抄軍は、モンゴルへの服属をきらって抵抗し、珍島・濟州島を拠点に 1273 年まで抵抗した。

二谷メモ：「とりあげる必要ない」「B」と書き込み。「鈴木亮」（248 頁）では「こんなとるに足りないことをわざわざとりあげる必要があるのか。どういう意味があるのか。B」と言われたとある。

レポート：⑧とるにたりないことをとりあげる必要あるか。どういう意味があるか。

供給本 88 頁

江華島防衛の主力部隊であった三別抄軍は、珍島・濟州島を拠点に 1273 年まで抗戦した。

白表紙本 92 頁（脚注③）

これは江戸時代の日本につたわり、1872 年の太陽暦採用まで貞享暦として使用された。

二谷メモ：「貞享暦」に○をつけ「そのまま採用でない」「A」と書き込み。

供給本 90 頁

これは江戸時代の日本につたわり、渋川春海（1639～1715）によって修正され、1872年の太陽暦採用まで貞享暦として使用された。

白表紙本 93 頁（挿図「魚鱗図冊」の説明）

なお租税台帳は、表紙に黄色の紙をもちいた租税や賦役の割り当ての原簿であったから、賦役黄冊またはたんに黄冊とよばれた。

二谷メモ：「表紙に黄色の紙を」に下線をつけ「表現」「B」と書き込み。

供給本 91 頁

なお、租税や賦役の割り当ての原簿であった租税台帳は、表紙に黄色の紙をもちいていたため、賦役黄冊または黄冊とよばれた。

白表紙本 93 頁（明朝の成立）

大土地所有者は、復活した科挙の試験をつうじて官僚となり、賦役免除などの特権をえて勢力をふるった。

二谷メモ：「賦役免除などの特権をえて勢力」に下線をつけ「太祖はおさえたはず」「おおげさだ」「B」と書き込み。

供給本 91 頁

大土地所有者は、復活した科挙の試験をつうじて官僚となり、賦役免除などの特権をえた。

白表紙本 93-94 頁（明朝の成立）

さらに、1405～33 年にかけてムスリムの宦官鄭和のひきいる艦隊を、7 回にわたり東南アジアからインド・西アジア・東アフリカの諸国にまで派遣し、朝貢をうながした。

二谷メモ：「東アフリカ」に下線をつけ「らしい B」と書き込み。

供給本 91-92 頁

さらに、1405～33 年にかけてムスリムの宦官鄭和のひきいる艦隊を、南海諸国に派遣して貢納をうながした。その艦隊は、東南アジアからインド・西アジア・アフリカ東岸にまで達した。

白表紙本 94 頁（日本・朝鮮・ベトナム）

14 世紀後半、日本では公貿易がとだえ、西日本の土豪・商人や海上民は、船団を組織して元寇以前から試みられていた略奪をともなう通商活動を展開した。

二谷メモ：「公貿易」に○をつけ「B」と書き込み。

供給本 92 頁

14 世紀後半、西日本の土豪・商人や漁民は、船団を組織して元寇以前から試みられていた略奪をともなう通商活動を展開した。

白表紙本 94 頁（日本・朝鮮・ベトナム）

朝鮮半島では、中国で明がたち、元の勢力がモンゴル高原に退いたのをきっかけに、…

二谷メモ：「表現」「B」と書き込み。

供給本 92 頁

中国で明がたち、元の勢力がモンゴル高原に退いたのをきっかけに、朝鮮半島では、…

白表紙本 95 頁（琉球）

琉球は東アジア通商圏の中心に位置して、活発な海上貿易をつづけていたが、16 世紀にはいってポルトガルが進出すると、中継貿易の特権を失っておとろえた。

二谷メモ：「特権」に下線をつけ「利益でどうか」「あたえられたのではない」「B」と書き込み。

供給本 93 頁

琉球は東アジア通商圏の中心に位置して、活発な海上貿易をつづけていたが、16 世紀にはいってポルトガルが進出すると、中継貿易の利益を失っておとろえた。

白表紙本 95 頁 (琉球)

さらに 1609 年には薩摩藩に服属をしいられ、薩摩藩の対明貿易に利用されるにいたった。

二谷メモ : 「薩摩藩に服属をしいら」に下線をつけ「どきつい」「B」と書き込み。

レポート : ㊸ どきつい表現。

供給本 93 頁

さらに 1609 年には薩摩藩の攻撃をうけて支配下におかれ、薩摩藩の対明貿易に利用されるにいたった。

白表紙本 95 頁 (15～16 世紀の東アジア)

…、日本では、応仁の乱 (1467～77 年) ののち、室町幕府の支配力はまったく失われ、土豪・戦国大名が台頭し、勘合貿易の実権は堺や博多の商人に移った。

二谷メモ : 「土豪」に下線をつけ「なにか」「B」と書き込み。

レポート : ㊸ (16 行分) 日本の話はあまりいらない。

供給本 93 頁

…、日本では、応仁の乱 (1467～77 年) ののち、室町幕府の支配力はまったく失われて、戦国大名が台頭し、勘合貿易の実権は堺や博多の商人に移った。

白表紙本 95 頁 (15～16 世紀の東アジア)

また、倭寇がふたたびはげしい活動をはじめ、…

二谷メモ : 「また」「ふたたび」に下線をつけ「B」と書き込み。

供給本 93 頁

倭寇はふたたびはげしい活動をはじめた。

白表紙本 96 頁 (15～16 世紀の東アジア)

朝鮮では、15 世紀末から両班の勢力争いがはげしくなり、李朝の力はよわまった。

二谷メモ : 「両班」に下線をつけ「官僚のあらそい」「A」と書き込み。

供給本 94 頁

朝鮮では、15 世紀末から官僚の勢力争いがはげしくなり、李朝の力はよわまった。

白表紙本 96 頁 (15～16 世紀の東アジア)

スペインも、ノバエスパーニャ (メキシコ) の銀をもちこんで、中国の生糸・薬などと交換した。

二谷メモ : 「ノバエスパーニャ」に下線をつけ「B」と書き込み。

供給本 94 頁

スペインも、メキシコの銀をもちこんで、中国の生糸・薬などと交換した。

白表紙本 96 頁 (明の社会と文化の発展)

…一条鞭法もうまれた。

二谷メモ : 「うまれた」に下線をつけ「B まずい」と書き込み。

供給本 94 頁

…一条鞭法も制定された。

白表紙本 97-98 頁 (マンジュの発展)

かれは、満州文字を創始し、マンジュ人・モンゴル人・漢人を八旗制とよぶ軍団に編成し、機動力のある軍事行動を展開した。

二谷メモ : 「かれは」に○をつけ「A」と書き込み。また、「八旗」に○をつけ「モンゴル人」とむすんで「1635」、「漢人」と結んで「1642」と書き込み。さらに、「機動力のある軍事行動」に下線をつけ「ちがう」「A」と書き込み。

供給本 96 頁

かれは、満州文字を創始し、マンジュ人を八旗の制とよぶ世襲的軍団に編成した。のちには、モンゴル人・漢人の八旗もつくられた。

白表紙本 98 頁 (清朝の中国統一)

ベトナム・タイ・ビルマも朝貢国となり、…

二谷メモ：「B」「朝鮮をいれて」と書き込み。

供給本 97 頁

(変更なし)

白表紙本 100 頁 (清の社会と文化)

都市と農村をむすんで商品や銀貨がさかんに流通し、同郷や同業の組合 (会館・公所) がつくられた。

二谷メモ：「会館・公所」に○をつけて「明代中期」「A」と書き込み。

供給本 98 頁

…、都市と農村をむすんで商品や銀貨がさかんに流通した。

白表紙本 100 頁 (清の社会と文化)

…、西北部諸地域や雲南・華南では、ムスリムや苗・傜などの少数民族も蜂起した。

二谷メモ：「雲南・華南」に下線、「華南」に○をつけて「B」と書き込み。

供給本 98 頁

…、西北部諸地域や華南地方では、ムスリムや苗・傜などの少数民族も蜂起した。

白表紙本 100 頁 (東アジアとヨーロッパ)

16 世紀にはいると、西ヨーロッパローマ公教勢力が東アジアにもあらわれ、…

二谷メモ：「ローマ公教」に下線をつけて「カトリック」「A」と書き込み。

供給本 98 頁

16 世紀にはいると、ローマ公教勢力が東アジアにもあらわれ、…

白表紙本 100 頁 (東アジアとヨーロッパ)

…、16 世紀半ばマカオ・平戸、ついで長崎を貿易活動の根拠地とした。

二谷メモ：「長崎」「根拠地」に下線をつけて「A」「?」「とはいえない」と書き込み。

供給本 98 頁

…、16 世紀半ばマカオ・平戸、ついで長崎を貿易活動の足場にした。

白表紙本 101 頁 (東アジアとヨーロッパ)

…、ブーベ (白進) は中国最初の実測地図『皇輿全覧図』を作成した。

二谷メモ：「一人でないの」「A」と書き込み。

供給本 99 頁

…、ブーベ (白進) は中国最初の実測地図『皇輿全覧図』の作成に協力した。

白表紙本 101 頁 (東アジアとヨーロッパ)

日本では、江戸幕府をひらいた徳川家康が、ヤン=ヨーステン・ウィリアム=アダムスを外交顧問とし、田中勝助らの商人をノバエスパーニャに送り、伊達政宗も支倉常長ら一行をローマ教皇とスペイン国王のもとに送って通商をもとめた。

二谷メモ：「いないの」「B」と書き込み。

供給本 99 頁

日本では、徳川家康が、ヤン=ヨーステン・ウィリアム=アダムスを外交顧問とし、田中勝助らの商人をメキシコに送り、伊達政宗も支倉常長ら一行をローマ教皇とスペイン国王のもとに送って通商をもとめた。

白表紙本 101-102 頁 (東アジアとヨーロッパ)

しかし、やがて江戸幕府は、貿易利益の独占と封建的な身分秩序の維持をはかり、キリスト教禁止の政策を強化し、1635 年、日本人の海外渡航と在外日本人の帰国を禁じた。

二谷メモ：「あとではないか」「B」と書き込み。

供給本 99-100 頁

しかし、やがて江戸幕府は、封建的な身分秩序の維持と貿易利益の独占をはかり、キリスト教禁止の政策を強化し、1635 年、日本人の海外渡航と在外日本人の帰国を禁じた。

白表紙本 101 頁 (脚注②)

イエズス会以外の諸会派が、中国人の習俗を認めたイエズス会の布教方針に反対して、ローマ教皇に訴えたため、教皇庁をもまきこんだ論争となった。これが典礼問題とよばれるものである。

二谷メモ：「習俗」に○をつけ「どういうものか 具体的に」「A」と書き込み。

供給本 99 頁

イエズス会が布教活動を円滑におこなうため、中国人の信者が孔子崇拝や祖先崇拝の儀式(典礼)に参加することを認めたことに関する問題で、典礼問題とよばれる。

白表紙本 102 頁 (東アジアとヨーロッパ)

…、オランダ・清・朝鮮と琉球だけに貿易をかぎった。

二谷メモ：「同列ではないはず」「A」と書き込み。

レポート：④琉球は同列ではない。

供給本 100 頁

…、オランダ・清・朝鮮だけに貿易をかぎった。

白表紙本 102 頁 (東アジアとヨーロッパ)

…、将軍の代がわりごとに朝鮮の通信使が日本をおとずれた。

二谷メモ：「代がわり」に下線をつけ「かならずしも」「B」と書き込み。

供給本 100 頁

…、朝鮮の通信使が日本をおとずれた。

白表紙本 102 頁 (東アジアとヨーロッパ)

また、蘭学を学ぶ人びとの間にも、幕府の政治を批判する機運がじょじょに高まっていった。

二谷メモ：「のみ」「他にもいた」「国学」「A」と書き込み。

供給本 100 頁

また、蘭学や国学を学ぶ人びとの間にも、幕府の政治を批判する機運がじょじょに高まっていった。

白表紙本 103 頁 (タイとラオス)

14 世紀中ごろ、タイの東北にラオス人がランチャン朝をたて、1563 年ビエンチャンに都をおいた。

二谷メモ：「ランチャン朝」に○をつけ「不要」と書き込み。

供給本 101 頁

14 世紀中ごろ、タイの東北にラオス人の王朝がうまれ、1563 年ビエンチャンに都がおかれた。

白表紙本 103 頁 (マジャパヒト朝とマラッカ朝)

13 世紀はじめ、ジャワ島に成立したシンガサリ朝は、スンダ列島に支配をひろげた。1292 年、元軍の攻撃をうけ、シンガサリ朝はこれを撃退したが、王族の 1 人が権力をうばい、マジャパヒト朝をおこした。

二谷メモ：「シンガサリ朝」に○をつけ「不要」と書き込み。

供給本 101 頁

ジャワ島では、13 世紀末、元軍の攻撃を退けたのち、マジャパヒト朝が成立した。

白表紙本 104 頁 (「マジャパヒト朝の最大領域」地図)

二谷メモ：「ゴチゴチ」「B」と書き込み。

供給本 102 頁

(地名・河川名等減じる。)

白表紙本 105 頁 (ヨーロッパ勢力の侵入)

スペイン王の命をうけたマゼラン (マカリヤニス) も、…

二谷メモ：「マカリヤニス」に○をつけ「不要」「B」「岩波人名辞典 マカリヤエンシュ」と書き込み。

レポート：③ () 内不必要。

供給本 102 頁

スペイン王の命をうけたマゼランも、…

白表紙本 106 頁 (ムスリム諸王朝のインド支配)

北インドでは、13～16 世紀前半まで、デリーを都とする奴隷王朝など五つのムスリム王朝 (デリー・スルタン王朝) が交替し、…

二谷メモ：「13～16 世紀前半」に下線、「奴隷王朝など五つのムスリム王朝」から線で飛ばして「参照頁 p. 31」と書き込み。

供給本 104 頁

(「奴隷王朝」の下部に (→p. 31) と付す。)

白表紙本 106 頁 (ムスリム諸王朝のインド支配)

ビジャナガル朝のもとでは、ヒンズー寺院がたてられ、テルグ語文学がさかんで、インド古来の伝統によった特色ある南インドの文化がうまれた。

二谷メモ：「テルグ語文学」に○をつけ「A」と書き込み。

供給本 104 頁

ビジャナガル朝のもとでは、ヒンズー神殿がたてられ、インド古来の伝統によった特色ある南インドの文化がうまれた。

白表紙本 107 頁 (ムスリム諸王朝のインド支配)

やがて 15 世紀末には、この地方にポルトガルが進出し、インド諸王朝の対立を利用しながら、ゴア (1510 年)・ディウ (1535 年)などを貿易基地として占領した。

二谷メモ：「ディウ (1535 年)」に○をつけ「ビジャナガルと関係ない」「A」と書き込み。

供給本 105 頁

やがて 15 世紀末には、インドにポルトガルが進出し、インド諸王朝の対立を利用しながら、ゴア (1510 年)・ディウ (1535 年)などを貿易基地として占領した。

白表紙本 107 頁 (「ラージプートの砦を攻めるアクバル軍」挿絵)

二谷メモ：「みにくい」と書き込み。

供給本 105 頁

(挿絵を若干拡大している)

白表紙本 107 頁 (挿図「ラージプートの砦を攻めるアクバル軍」の説明)

1568 年、アクバル軍はランサンポールのラージプートの砦を陥落させ、南方への膨張の道をひらいた。

白表紙本 107 頁 (ムガル帝国の成立)

また、インド西部のラージプート族の諸王侯とむすんでインドの統一をはかり、ヒンズー教徒だけにかかけられていた人頭税や巡礼税を廃止した。

二谷メモ：「ラージプート」から矢印を引き、また「むすんで」に○をつけて矢印を引いて、「組シキハイツ」「A」と書き込み。

供給本 105 頁

(挿図説明に変更なし)

供給本 105 頁

また、抵抗するラージプート族の諸王侯にたいして、宥和政策をとってインドの統一をはかり、ヒンズー教徒だけにかけられていた人頭税や巡礼税を廃止した。

供給本 105 頁 (脚注②)

(「ラージャスタン」に「インド西部の」と追加)

白表紙本 107 頁 (脚注①)

父方はチムール系、母方はチングス汗系の血をうけ、チムールの5代目にあたるといわれる。

二谷メモ：「といわれる」に下線を付し「A」と書き込み。

供給本 105 頁

(変更なし)

白表紙本 108 頁 (インドーイスラム文化)

ヒンディー文学もさかんとなり、トウルシー＝ダースの詩『ラーマチャリットマーナース』は、『ラーマーヤナ』の翻案で、貴賤貧富の別なく親しまれた。

二谷メモ：「トウルシー＝ダースの詩『ラーマチャリットマーナース』は」に〈 〉を付し「不要」と書き込み。

供給本 106 頁

ヒンディー文学もさかんとなった。

白表紙本 108 頁 (ムガル帝国の衰退)

第6代皇帝オーラングゼーブ (アウラングゼーブ) は、…

二谷メモ：「(アウラングゼーブ)」に○をつけ「B」と書き込み。

供給本 106 頁

第6代皇帝アウラングゼーブは、…

白表紙本 109 頁 (ネパールとビルマ)

9世紀チベットから自立したネパールでは、14世紀以後マッラ朝が支配していたが、18世紀後半グルカ人がマッラ朝をたおし、カトマンズ地方を支配して勢力をひろげた。かれらは、シッキム王国やインドのシク教国と対立し、1791年にはチベットに侵入したが、清・チベット軍とたたかってやぶれ、休戦協定をむすんだ。

ビルマでは、1287年にパガン朝が元軍の侵入で滅び、小王国対立の時代がつづいた。それらの小王国のうち、南部のペグーを中心にモン族の国がさかえた。この国は、東南アジア諸国をはじめインド・中国と貿易をおこない、セイロンとの交流によって仏教がさかんとなった。1531年、トゥングー朝が成立し、領土をひろげ、ペグーを都としてさかえたが、のちタイのアユタヤ朝とたたかって疲弊し、おとろえた。つぎのアラウンパヤー朝は、タイに遠征してアユタヤ朝を滅ぼし、アッサムにも領土をひろげた。

二谷メモ：2段落全体を線で示して「表現」「B」と書き込み。「シッキム王国」に○をつけて「地図なし」「説明」「A」と書き込み。

レポート：(14行分) ㊸詳細すぎる。

供給本 107 頁

ネパールは、9世紀ころにチベットから自立したが、18世紀後半、グルカ人が、カトマンズ地方を支配して勢力をひろげた。かれらは、インドのシク教国とも対立し、1791年にはチベットに侵入したが、清・チベット軍とたたかってやぶれ、休戦協定をむすんだ。

ビルマでは、1287年にパガン朝が元軍の侵入で滅び、小王国対立の時代がつづいた。1531年、トゥングー朝が成立し、領土をひろげ、ペグーを都としてさかえたが、のちタイのアユ

タヤ朝とたたかって疲弊し、おとろえた。つぎのアラウンパヤー朝は、タイに遠征してアユタヤ朝を滅ぼし、アッサムにも領土をひろげた。

白表紙本 109 頁 (脚注①)

…、諸侯の連合体 (マラータ同盟) となり、よわまっていった。

二谷メモ: 「よわまっていった」に下線をつけ「まだつよい」 「B」 と書き込み。

供給本 107 頁

…、諸侯の連合体 (マラータ同盟) となった。

白表紙本 111 頁 (イル汗国とマムルーク朝)

シリアをめぐるイル汗国とマムルーク朝との抗争は、13 世紀の後半にはげしさをました。イル汗国は、十字軍に失敗した西ヨーロッパ諸国にはたらきかけて友好関係をつくりあげようとし、マムルーク朝もこれに対抗して、いちじキプチャク汗国と同盟をむすんだ。

二谷メモ: 1 段落全体をくくって「P88～P89 のくりかえす」 「A」 と書き込み。

供給本 109 頁

(変更なし)

白表紙本 111 頁 (イル汗国とマムルーク朝)

サアディーの詩『グリースターン』(ばら園) やルーミーの『マスナビー』(叙事詩)、ラシード＝ウッディーンの『集史』などが書かれ、後世のヨーロッパ文化にも大きな影響をあたえた。

二谷メモ: 「グリースターン」「マスナビー」「集史」「大きな」に○をつけ、線でむすんで「A」「不要」と書き込み。

レポート: ㊸ 不必要。

供給本 109 頁

サアディーの詩『ばら園』やラシード＝ウッディーンの『集史』などが書かれ、後世のヨーロッパ文化にも影響をあたえた。

白表紙本 112 頁 (地図「イル汗国とマムルーク朝」)

二谷メモ: 地図記載の実線の注釈「ラバン＝ソーマの西ヨーロッパ旅行 (1287～88)」から線を引き「わからない」 「A」 と書き込み。

供給本 110 頁

(地図は削除)

白表紙本 113 頁 (「山をこえるオスマン艦隊」挿絵説明)

…金角湾内に陸上輸送をおこない、攻略を成功させた。

二谷メモ: 「をおこない」に下線を引き「し」と書き込み。また絵に対しては「B」「地図がほしい」と書き込み。

供給本 110 頁

…金角湾内に陸上輸送し、攻略を成功させた。(地図はなし)

白表紙本 113 頁 (チムール帝国)

チムール帝国は、1506 年、南下してきたウズベク族によって滅ぼされた。

二谷メモ: 「1506 年」に○をつけ「あやまり」 「A」 と書き込み。

供給本 111 頁

チムール帝国は、1500 年、南下してきたウズベク族によって滅ぼされた。

白表紙本 113-114 頁 (オスマン帝国)

オスマン朝は、チムール軍が退くとすぐに復興し、ヨーロッパはふたたび危機に直面した。

二谷メモ: 「ヨーロッパはふたたび危機に直面した」に下線を付して「神聖・ビザンだけで」

「B」と書き込み。

供給本 111 頁

オスマン朝は、チムール軍が退くとすぐに復興し、ヨーロッパ諸国はふたたび危機に直面した。

白表紙本 114 頁 (オスマン帝国)

つづいて 1538 年のブレバザの海戦で、オスマン海軍はベネチア・スペイン・ローマ教皇の連合軍をやぶり、地中海の制海権をにぎった。

二谷メモ：「地中海の制海権をにぎった」に下線。

レポート：㊤高く評価しすぎる。

供給本 111 頁

(変更なし)

白表紙本 115 頁 (オスマン帝国)

1571 年のレパントの海戦では、オスマン海軍は、ベネチア・スペイン・ジェノバ・ローマ教皇の連合軍にやぶれたが、オスマン帝国の国威はゆるがなかった。

二谷メモ：「オスマン帝国の国威はゆるがなかった」に下線を付して「オスマンたかすぎる」

「A」と書き込み。

レポート：㊤高く評価しすぎる。

供給 112 本頁

1571 年のレパントの海戦では、オスマン海軍は、ベネチア・スペイン・ジェノバ・ローマ教皇の連合軍にやぶれた。

白表紙本 115-116 頁 (オスマン帝国)

裁判制度もとのい、中央政府が任命する裁判官によってムスリムにはイスラム法がきびしく施行された。

二谷メモ：文の上部に「イスラム教徒がかくくに ？」と書き込み (囲みは判読不能)。

供給本 112 頁

また、裁判制度もとのえられた。

白表紙本 116 頁 (第二次ウィーン包囲)

17 世紀の後半になると、神聖ローマ帝国やフランスのほかに、ポーランドやロシアも反オスマン同盟の形成にむかった。

二谷メモ：「フランスのほか」に下線。

供給本 113 頁

17 世紀の後半になると、神聖ローマ帝国のほかに、ポーランドやロシアも反オスマン同盟の形成にむかった。

白表紙本 116 頁 (第二次ウィーン包囲)

いっぽう、オスマン帝国では無能なスルタンがあいつぎ、政治がみだれ、各地で反乱がおこりはじめた。1683 年、オスマン軍による第二次ウィーン包囲は、東西両勢力が結集して全面対決となったが、けっきょくオスマン軍はやぶれ、1699 年のカルロフチャ (カルロビッツ) 条約で、ハンガリアの大半を失った。

二谷メモ：引用部分をくくって「A」と書き込み。

供給本 113-114 頁

いっぽう、オスマン帝国では無能なスルタンがあいつぎ、政治がみだれ、各地で反乱がおこりはじめた。1683 年、オスマン軍による第二次ウィーン包囲は、東西両勢力が結集して全面対決となったが、けっきょくオスマン軍はやぶれ、1699 年のカルロビッツ条約で、ハンガリアの大半を失った。

白表紙本 117 頁（都市の発達）

…、農業の生産力が向上し、地方特産物の生産と販売が活発になるにつれて、…

二谷メモ：「向上し、」と「地方特産物」の間に矢印を入れて「また」「B」と書き込み。

供給本 115 頁

…、農業の生産力が向上し、また地方特産物の生産と販売が活発になるにつれて、…

白表紙本 117 頁（都市の発達）

また、東方への輸出品になる毛織物・麻織物・金属製品などの生産も刺激され、ブリュージュなどフランドルの都市、フィレンツェなどイタリアの内陸都市でこれらの手工業が発達しはじめた。

二谷メモ：欄外に「スラブとものがちがう」「ダルマチアの奴 \square 」と書き込み（囲みは判読不能）。欄外に「A」と書き込み。「麻織物」に○をつけて「むりではないか」と書き込み。

供給本 115 頁

また、東方への輸出品になる毛織物の生産が、ブリュージュなどフランドルの都市、フィレンツェなどイタリアの内陸都市で発達しはじめた。

白表紙本 117 頁（脚注①「ハンザ同盟」）

…、最盛期には加盟市 100 をこえたといわれる。

二谷メモ：「100 をこえた」に下線を引いて、「70」「100 に達する」「A」と書き込み。

供給本 115 頁

いちじは加盟市は 90 余にのぼり、…

白表紙本 117 頁（都市の発達）

有力な都市の市民は、領主が重税をかけると、これに反抗して自治権を獲得した。また、ドイツやフランスでは、皇帝や国王が封建諸侯に対抗するために、特許状をあたえた直属の自由都市を多数つくった。

二谷メモ：「領主が重税をかけると、これに反抗して自治権を獲得した」に下線を引いて、「必要なし」「A」と書き込み。「直属の自由都市を多数つくった」を下線を引いて「A」「フランスにないので」と書き込み。

供給本 115 頁

都市は、はじめは封建諸侯に隷属していた。しかし、市民は経済活動の発展をもとめて、イギリス・フランでは国王とむすび、その保護をうけるようになった。ドイツでは、神聖ローマ皇帝が、諸侯に対抗するために都市に特許状をあたえ、直属の自由都市を多数つくった。

白表紙本 117 頁（脚注③）

農村から都市に逃げこんだ農奴は、満 1 年たてば自由民になれた。

二谷メモ：「満 1 年」に下線を引いて、「1 年 1 日」「B」と書き込み。

供給本 115 頁

農村から都市に逃げこんだ農奴は、1 年と 1 日たてば自由民になれた。

白表紙本 118 頁（新しい文化）

…、13 世紀になると、ファブリオ（小ばなし）のような諷刺のきいた民衆文学が流行し、都市の人びとに喜ばれた。

二谷メモ：「ファブリオ（小ばなし）」に○を付けて「あげるほどの価値ありや」「B」と書き込み。

供給本 116 頁

（削除）

白表紙本 119 頁 (東ヨーロッパの動き)

モンゴル人のキプチャク汗国に支配された南ロシアでは、14 世紀以後、水陸交通の要地にあったモスクワ公国が、ノブゴロド公国をはじめ他の諸公国を従えて発展しはじめた。

二谷メモ：「南ロシアでは、14 世紀以後、水陸交通の要地にあったモスクワ公国が」に下線を引き、その中の「南ロシア」と「モスクワ公国」に○を付けて、「A」と書き込み。

供給本 117 頁

ロシアでは、14 世紀以後、水陸交通の要地にあったモスクワ公国が、ノブゴロド公国をはじめ他の諸公国を従えて発展しはじめた。

白表紙本 119 頁 (東ヨーロッパの動き)

ボヘミアは、14 世紀からドイツ系の国王のもとで充実し、カレル 1 世 (神聖ローマ皇帝としてはカール 4 世) のとき、大いにさかえた。

二谷メモ：「カレル 1 世」に○を付けて、「英語よみに」と書いて棒線で消してある。「B」と書き込み。

レポート：㊦「カレル 1 世」は耳なれない。英語読みに統一。

供給本 117 頁

ボヘミアも 14 世紀に大いにさかえ、…

白表紙本 119 頁 (13～15 世紀のイギリスとフランス)

フランスでは、…西北部にあったイギリス王室の領土もジョン王からうばった。

二谷メモ：「ジョン王」に○を付けて、「どこの王」「B」と書き込み。

供給本 117 頁

…フィリップ 2 世は王領地の拡大につとめ、イギリスのジョン王と争って、フランス西北部のイギリス領の大部分をうばった。

白表紙本 119-120 頁 (13～15 世紀のイギリスとフランス)

…、1215 年、王に大憲章 (マグナ・カルタ) を認めさせて、新課税については諸侯・聖職者の会議の承認をえることなどを約束させた^①。さらに 15 世紀半ばには、…身分制議会を設けさせた。

二谷メモ：「約束させた^①。」に下線を引き、次の文の文末を線で示して「A」と書き込み。

(注の番号の位置の訂正)

供給本頁

(注の番号の位置を「身分制議会を設けさせた」の部分に移動)

白表紙本 120 頁 (農村の変化)

…荘園領主は、より多くの貨幣を獲得するために、直営地を農民に小作させるようにし、地代を生産物や貨幣でとるようになった。農民も生産物を売って貨幣をたくわえ、経済的地位を向上させる機会がふえた。

二谷メモ：「直営地を…経済的地位を向上させる機会がふえた」の部分にくくり、その中の「農民も生産物を売って貨幣をたくわえ」に下線を引いて、「B」と書き込み。

供給本 118 頁

…荘園領主は、より多くの貨幣を獲得するために、直営地を農民に小作させるようにし、地代を生産物や貨幣でとるようになった。また、都市の発達とともに農産物の需要がまし、賦役の廃止や年貢の軽減などもあって、農民の経済的地位は向上した。

白表紙本 120-121 頁 (農村の変化)

領主が戦争や財政の苦しさから収奪をきびしくすると、農民は逃亡や一揆で対抗した。

二谷メモ：「収奪」の前に「ふたたび」と挿入して「B」と書き込み。

供給本 119 頁

領主が戦争や財政の苦しさからふたたび収奪をきびしくすると、農民は逃亡や一揆で対抗し

た。

白表紙本 121 頁 (14～15 世紀のドイツ・イタリア)

…、カール 4 世が金印勅書によって、ドイツの聖俗諸侯に選帝侯の特権をあたえたことにより、…

二谷メモ：「選帝侯」の前に矢印を引いて「七」「B」と書き込み。「鈴木亮」(250 頁)には「七選帝侯をどこかにいれよ。B」と言われたとある。

供給本 119 頁

(変更なし)

白表紙本 122 頁 (ルネサンスのおこり)

…、ルネサンス (復活) とよばれる文化の革新がおこった。

二谷メモ：「復活」に下線を引いて、「再生」と書き込み。

レポート：㊦「(再生)」ではないか。

供給本 120 頁

…、ルネサンス (再生) とよばれる文化の革新がおこった。

白表紙本 122 頁 (ルネサンスのおこり)

…人びとの態度が、ギリシア・ローマの文化を復活させようとする機運をうみ、古典を研究する人文主義者 (ヒューマニスト) をうみだした。

二谷メモ：2 か所の「うみ」に○を付けて「くりかえし」「B」と書き込み。

供給本 120 頁

…人びとの態度が、ギリシア・ローマの文化を復活させようとする機運をうみ、古典を研究する人文主義者 (ヒューマニスト) があらわれた。

白表紙本 122 頁 (ルネサンスのおこり)

…、市政を支配する金融貴族のメジチ家が、…

二谷メモ：「金融貴族」に○を付けて「?」「B→A」と書き込み。

供給本 120 頁

…市政を支配するようになった大金融業者のメジチ家が、…

白表紙本 122 頁 (ルネサンスのおこり)

14 世紀にダンテの『神曲』が書かれ、ペトラルカ・ボッカチオらが人間の情感や欲望をイタリア語で率直に表現して、ルネサンス文学の先駆となった。

二谷メモ：「ペトラルカ」に○を付けて、「は率直か」と書き込み。「イタリア語で率直に表現して」に下線を引いて、矢印で『神曲』につなげて「にいわないか」「B」と書き込み。

供給本 120 頁

14 世紀にダンテの『神曲』がイタリア語で書かれ、ペトラルカの叙情詩、ボッカチオの物語 (『デカメロン』など) とともに、ルネサンス文学の先駆となった。

白表紙本 122 頁 (ルネサンスのおこり)

15 世紀にはいると、造形美術がさかんになり、多数の職人をかかえた工房で共同制作がおこなわれた。

二谷メモ：「15 世紀にはいると、造形美術がさかんになり」に下線を引いて「B」と書き込み。

供給本 120 頁

また、造形美術がさかんになり、多数の職人をかかえた工房で共同制作がおこなわれた。

白表紙本 122 頁 (ルネサンスのおこり)

…、ブルネレスキ・レオナルド＝ダ＝ビンチや、ミケランジェロ・ラファエロら個性的でオ

能豊かな芸術家があらわれ、彫刻や絵画・建築など多くの傑作を残した。

二谷メモ：「彫刻や絵画・建築など」に下線を引き、「序順」「B」と書き込み。その中の「彫刻」の下に「②」、「絵画」の下に「①」、「建築」の下に「③」と書き込み。

供給本 120 頁

…、ブルネレスキ・ブラマンテ・レオナルド＝ダ＝ビンチや、ミケランジェロ・ラファエロら個性的で才能豊かな芸術家があらわれ、建築や彫刻・絵画などに多くの傑作を残した。

白表紙本 122-123 頁（教皇権の衰退）

…、教皇庁がフランス王フィリップ 4 世によってアビニョンに移されるなど（1309～77 年）、ローマ公教会の権威はゆらぎだした。

二谷メモ：「教皇庁がフランス王フィリップ 4 世によってアビニョンに移されるなど」を示し、特にその中の「移される」に二重下線を引いて「移されるのではなく」と書き込み。

供給本 121 頁

…、教皇ボニファチウス 8 世とフランス王の争いのあと、教皇庁は南フランスのアビニョンにおかれ、…

白表紙本 123 頁（教皇権の衰退）

教皇庁がローマにもどると、フランス王の保護をうける教皇がアビニョンにもたち、正統を主張したため、公教会は分裂した（1378～1417 年）。

二谷メモ：欄外に「大シスマ」「入れた方が」と書き込み。「鈴木亮」（250 頁）には「教会大分裂・シスマという歴史用語をどこかにいれよ。B」と指示されたとある。

レポート：⑧シスマの大分裂を入れよ。

供給本 121 頁

14 世紀後半、教皇庁はローマにもどったが、アビニョンにも教皇がたち、たがいに正統を争ったため、公教会は分裂した（シスマ、1378～1417 年）。

白表紙本 123 頁（教皇権の衰退）

…、ローマ教皇の正統を決定して教会分裂をおわらせ、フスを異端として火刑にした。

二谷メモ：「フス」の前に「また」と書き込み。

供給本 121 頁

…、ローマ教皇の正統を決定して教会分裂をおわらせた。また、この会議でフスは異端とされ、火刑に処せられた。

白表紙本 123 頁（ルターの改革）

フスの改革運動は失敗したが、…

二谷メモ：「失敗した」に下線を引いて、「といえるか」「おさえられた」「B」と書き込み。

供給本 121 頁

フスの改革運動はおさえられたが、…

白表紙本 123 頁（ルターの改革）

教皇は聖ペテロ聖堂の改築資金を集めるため免罪符を発行し、…

二谷メモ：「免罪符」に○を付けて「贖宥符」「B」と書き込み。

レポート：⑧贖宥符、ねんしょう符では。

供給本 121 頁

教皇は聖ペテロ聖堂の改築資金を集めるため贖宥符を発行し、…

白表紙本 123-124 頁（ルターの改革）

農民戦争を平定した諸侯は、領内にルター主義をとりいれ、領邦教会の確立をめざした。

二谷メモ：「領邦教会」に○を付けて、「A」と書き込み。

供給本 122 頁

農民戦争を平定した諸侯は、領内にルター主義をとり入れ、教会の統制をはかった。

白表紙本 124 頁（プロテスタントカトリック）

また、ルター派やカルバン派をプロテスタントという。

二谷メモ：「ルター派やカルバン派をプロテスタントという」に下線を引いて「とってつけたいい方」「注に」と書き込み。

供給本 122 頁

（削除）「ルターの改革」の中の「その後もルター派諸侯と皇帝派との争いがつづいたが、…」に新たに脚注を付して説明）

白表紙本頁（プロテスタントとカトリック）

いっぽう、ローマ公教会も、プロテスタントに対抗して内部の革新をすすめた。…、カトリックの勢力回復と拡大のために精力的な活動を始めた。

二谷メモ：「ローマ公教会」と「カトリック」に○。

供給本 122 頁

いっぽう、ローマ公教会（カトリック）も、プロテスタントに対抗して内部の革新をすすめた。…、ローマ公教会の勢力回復と拡大のために精力的な活動を始めた。

白表紙本 125 頁（アルプス以北のルネサンス）

人文主義者は聖書をギリシア語原典から研究し、ローマ公教会の欠陥を批判したが、他方プロテスタントの極端な主張にも疑いをもった。

二谷メモ：「ローマ公教会」に○。

供給本 123 頁

人文主義者は聖書をギリシア語原典から研究し、ローマ公教の欠陥を批判したが、他方プロテスタントの極端な主張にも疑いをもった。

白表紙本 125 頁（イベリア半島の形勢）

…、ポルトガル・アラゴン・カスチリアのキリスト教王国のレコンキスタが勢いをました。

二谷メモ：「カスチリア」に○を付けて「カスチラ」「B」と書き込み。

供給本 124 頁

…、ポルトガル・アラゴン・カスチリャのキリスト教王国のレコンキスタが勢いをました。

白表紙本 126 頁（大西洋への進出）

また、オスマントルコの攻撃の脅威が西ヨーロッパにせまるなかで、世界終末説の信仰がひろがり、危機感も強まった。15 世紀には、ピエール＝ダイの地球球体説が普及しており、多くの他教徒をカトリックに改宗させようという使命感が高まっていた。ジェノバうまれのコロンブス（コロン）はこの説を信じ、…

二谷メモ：欄外に「A」「配慮」と書き込み。「多くの他教徒をカトリックに」に下線を引き、その中の「カトリック」に○。「コロン」に○を付けて「不要」と書き込み。

供給本 124 頁

また、オスマントルコの攻撃の脅威が西ヨーロッパにせまるなかで、世界終末説の信仰が強まり、それとともに他教徒をローマ公教に改宗させようという使命感が高まっていた。15 世紀にひろまっていたピエール＝ダイの地球球体説を信じたコロンブスは、…

白表紙本（脚注②）

従来、トスカネリ（1397～1482）が地球球体説を説いたとされてきたが、実際に影響が大きかったのはピエール＝ダイの説であった。

二谷メモ：文章をくくって「不必要」「B」と書き込み。

供給本 124 頁

（削除）

白表紙本 126 頁 (大西洋への進出)

またマゼラン (マカリヤンイス) は、西まわりでモルッカ諸島の攻略を考え、…

二谷メモ: 「マカリヤンイス」に下線。

供給本 125 頁

またマゼランは、西まわりでモルッカ諸島の攻略を考え、…

白表紙本 127 頁 (アフリカ・アジアへの進出)

ポルトガルは、ムスリムから学んだ地形学・天文学の知識や羅針盤・航海術を役だてて、北アフリカの支配をめざし、その背後の西アフリカの探検にのりだした。それには金や奴隷を獲得するねらいもあった。

二谷メモ: 「北アフリカの支配をめざし」に下線を引き、「A」と書き込み。欄外に「?」「キリスト教」「砂金」と書き込み。

レポート: ④砂金・奴隷はほしかったが、支配までめざしたかどうか。

供給本 125 頁

ポルトガルは、ムスリムから学んだ地形学・天文学の知識や羅針盤・航海術を役だてて、西アフリカの探検にのりだした。それには金や奴隷を獲得するねらいもあった。

白表紙本 127 頁 (アフリカ・アジアへの進出)

さらにポルトガルは、1487 年にはアフリカの南端にまで達した。

二谷メモ: 「さらにポルトガルは」に下線を引いて「とうとつ」「前置き」と書き込み。

供給本 125 頁

やがて 1487 年にはアフリカの南端にまで達した。

白表紙本頁 (アフリカ・アジアへの進出)

…、バスコダ＝ガマが喜望峰をまわり、アラブの水先案内人に導かれて、1498 年、インド西岸のカリカットについて。

二谷メモ: 「アラブの水先案内人に導かれて」に下線を引いて「A」「最初からでなく」と書き込み。

レポート: ④はじめから「導かれた」のではない。

供給本 125 頁

…、バスコダ＝ガマが喜望峰をまわり、南アフリカでやとったアラブ人の水先案内人の先導で、1498 年、インド西岸のカリカットについて。

白表紙本 127 頁 (アフリカ・アジアへの進出)

…、以後ポルトガルは、…アフリカのモザンビークやインドのゴアなどを拠点にした。

二谷メモ: 「モザンビーク」に○を付けて「B」と書き込み。

供給本 126 頁

…、以後ポルトガルは、…アフリカ東岸のモザンビークやインドのゴアなどを拠点にした。

白表紙本 127 頁 (アフリカ・アジアへの進出)

またゴアには、アジアへのカトリック拡大の拠点もおかれた。

二谷メモ: 「カトリック拡大」に下線を引いて「とは」「B」と書き込み。

供給本 126 頁

(削除)

白表紙本頁 (16 世紀のスペイン)

フェリペ 2 世は、…1588 年にはイギリスとの決戦にやぶれて、海軍力が大打撃をうけるなど、16 世紀末から国力はおとろえをみせはじめた。

二谷メモ: 「決戦にやぶれて、海軍力が大打撃を」に下線を引いて「陸上戦」「B」と書き込

み。

供給本 126 頁

フェリペ2世は、…1588年には、無敵艦隊がイギリスにやぶれるなど、16世紀末から国力はおとろえをみせはじめた。

白表紙本頁（オランダの独立）

その指導者オラニエ公ウィレムは全州の統一をのぞんだが、南部がスペインに制圧されたため、北部の7州が独立を宣言し、…

二谷メモ：「南部がスペインに制圧されたため」に下線を引いて「A」「懷柔」と書き込み。

供給本 127 頁

その指導者オラニエ公ウィレムは全州の統一をのぞんだが、南部がスペインに懷柔されたため、北部の7州が独立を宣言し、…

白表紙本頁（絶対主義の成立）

西ヨーロッパでは、15～16世紀になると、封建貴族の力が弱体化し、国王による中央集権化がすすみ、封建貴族は、宮廷の家臣（宮廷貴族）として王権の保護下にはいった。国王は、行政・司法の権力をにぎって官僚による強力な支配をおこない、常備軍において国内の治安と対外戦争にそなえた。このような政治形態を絶対主義（絶対王政）とよんでいる。

二谷メモ：小見出し「絶対主義」から線を引いて「の説明がはっきりしない」と書き込み。全体をくくって「階級的□□」「A」と書き込み（囲みは判読不能）。「封建貴族」に○。

供給本 127 頁

西ヨーロッパでは、15～16世紀になると、封建貴族の没落がすすみ、国王が行政・司法・軍事の権力をにぎって、官僚による集権的な統治をおこなう政治がうちたてられた。このような政体を絶対主義（絶対王政）とよんでいる。

白表紙本頁（絶対主義の成立）

こうして国王の専制政治を正当化する王権神授説もうまれた。

二谷メモ：「王権神授説」に○を付けて「わからない」「前後」と書き込み。

供給本 127 頁

（削除）

白表紙本 129 頁（宗教戦争）

ローマ公教会の分裂にともなって、カトリックとプロテスタントの武装闘争が各地におこった。

二谷メモ：「カトリック」と「プロテスタント」に○。

供給本 128 頁

ローマ公教会の分裂にともなって、公教会側とプロテスタント教会側の武装闘争が各地におこった。

白表紙本 130 頁（宗教戦争）

…、すでに独立していたスイスとオランダは独立国として国際的に承認された。

二谷メモ：「独立していた」の前に「事実上」「A」と書き込み。

供給本 129 頁

…、すでに事実上独立していたスイスとオランダは独立国として国際的に承認された。

白表紙本 130 頁（脚注①）

オランダの法学者・外交官のグロチウス（1583～1645）は、三十年戦争のさなか『戦争と平和の法』をあらわし、国際法の父とされている。

二谷メモ：全体をくくって「本文との関係なし」「B」と書き込み。

供給本 129 頁

(削除)

白表紙本 131 頁 (フランスの絶対主義)

さらにルイ 14 世は、領土の膨張をねらってオランダ・ドイツ諸国・イギリスなどとの戦争をかさね、…

二谷メモ：「ドイツ諸国」に○を付けて「B」と書き込み。

供給本 129 頁

さらにルイ 14 世は、領土の膨張をねらってオランダ・オーストリア・イギリスなどとの戦争をかさね、…

白表紙本 132 頁 (フランスの絶対主義)

こうして 18 世紀には、繊細なロココ式芸術が、フランスを中心に全ヨーロッパに流行した。

二谷メモ：「こうして」に下線を引いて「なぜこうしてか」「A」と書き込み。

供給本 130 頁

18 世紀には、建築・彫刻・絵画ではバロック様式にかわって、繊細なロココ式芸術が、フランスを中心に全ヨーロッパに流行した。

白表紙本 132 頁 (イギリスの絶対主義)

イギリスでは、15 世紀以来、毛織物業が発達し、羊毛商人の活躍や地主による牧羊がさかんになった。チューダー朝のヘンリー 8 世は、かれらの活動を保護し、議会の味方にして 1534 年首長令をだし、国王を首長とするイギリス国教会（聖公会）をつくってローマ教皇と断絶した。

二谷メモ：「首長令」に○を付けて「エンクロージャーとの関連」「A」と書き込み。

供給本 130 頁

イギリスの絶対主義は、チューダー朝のヘンリー 7 世の時代にほぼ基礎がおかれた。つぎのヘンリー 8 世は、王妃との離婚問題でローマ教皇と対立したのを機会に、1534 年首長令をだし、国王を首長とするイギリス国教会（聖公会）をつくって教皇庁と断絶した。

白表紙本 133 頁 (ピューリタン革命)

また、牧羊をいとなむ新地主（ジェントリ）や自営農民（ヨーマンリー）、都市の商工業者のなかに、ピューリタンが増大し、議会にも進出しはじめた。

二谷メモ：「新地主」に○を付けて「？」と書き込み。「自営農民」の前に「独立」と書き込み。

供給本 131 頁

…、さかんに牧羊をいとなむジェントリや独立自営農民（ヨーマン）、羊毛商人などが富をたくわえ、新しい社会層に成長した。かれらの多くがピューリタンとなり、信仰と政治の自由をのぞんだ。

白表紙本 133 頁 (ピューリタン革命)

いっぽう、エリザベス 1 世の死後、姻籍にあたるスコットランド国王がジェームズ 1 世として即位し、…

二谷メモ：「姻籍」を「姻戚」に修正した部分に○を付けて「B」と書き込み。

供給本 131 頁

いっぽう、エリザベス 1 世の死後、スコットランド国王がジェームズ 1 世として即位し、…

白表紙本 133 頁 (挿図「イギリス共和国の議会」の題目)

二谷メモ：「イギリス共和国」に○を付けて「国名なし」と書き込み。

供給本 131 頁

(挿図題目を「共和国期の議会」と修正)

白表紙本 133 頁 (ピューリタン革命)

…、議会は、1628 年、議会に同意をえない課税や不法な逮捕を拒否する「権利の請願」を可決し、王に認めさせた。

二谷メモ：「議会に同意」に○を付けて「A」と書き込み。その中の「に」を消して「の」と書き込み。

供給本 131 頁

…、議会は、1628 年、議会の同意をえない課税や不法な逮捕を拒否する「権利の請願」を可決し、王に認めさせた。

白表紙本 134 頁 (ピューリタン革命)

水平派などに代表される都市・農村の下層民衆は、人民主権を主張し、革命の徹底化をのぞんだが、…

二谷メモ：「水平派」に○を付けて「旧式」と書き込み。

供給本 132 頁

(変更なし)

白表紙本 134 頁 (立憲王国の成立)

…、王は、課税・徴兵などの権利が議会有ることを決めた「権利の宣言」を認めて即位し、…

二谷メモ：「徴兵」に○を付けて「A」「まずい」「常備軍の保持」と書き込み。

供給本 132 頁

…、王は、議会が出した「権利の宣言」を承認して王位につき、…

白表紙本 135 頁 (立憲王国の成立)

…、イギリスの立憲政治もしたいに順調にあゆむようになった。

二谷メモ：「立憲政治」に○を付けて「A」と書き込み。

供給本 133 頁

…、イギリスの議会政治もしたいに順調にあゆむようになった。

白表紙本 135-136 頁 (イギリス市民社会と文化)

フランシス＝ベーコンが基礎づけた経験論哲学は、権威や偏見にとらわれずに、人間の自然権から政治・社会を考察することを教え、社会契約説を説くホッブズ・ロックらの思想をうんだ。

二谷メモ：「フランシス＝ベーコン」と「人間の自然権」を線で結んで「A」と書き込み。「政治・社会を考察することを教え」に下線を引いて「A」と書き込み。

供給本 134 頁

フランシス＝ベーコンは、実験と観察を真理の探究の根本態度とする経験論哲学をひらいた。また、ホッブズ・ロックは、社会や国家を人間の自然権から考察する考え方にすすみ、社会契約説を主張した。

白表紙本頁 (北・東ヨーロッパ)

これをきらって逃亡した農民は、ドン川・ドニエプル川の流域に自治的な地域集団(カザーク)をつくった。17 世紀はじめに成立したロマノフ朝も、いぜん専制政治をつづけたので、17 世紀の後半には、ドン・カザークのステパン＝ラージンのひきいる大規模な農民蜂起(1867～71 年)がボルガ川流域におこった。

二谷メモ：「専制政治」に○。「カザーク」に○を付けて「階級分化が要因」と書き込み。

供給本 134 頁

これをきらって逃亡した農民は、ドン川・ドニエプル川の流域に自治的な地域集団(カザーク)をつくった。17 世紀の後半には、ステパン＝ラージンは、ボルガ川流域の貧しい農民をひきいて大規模な農民蜂起(1867～71 年)をおこした。

白表紙本 136 頁 (北・東ヨーロッパ)

ポーランド・ボヘミア・ハンガリアなどの東ヨーロッパの国ぐにも、ロシア帝国と同じく、16 世紀から移動の禁止、賦役の強化など農奴制を強めた。

二谷メモ：「も」と「強めた」に○を付けて「A」「でも○○か」と書き込み（「○○」は原文通り）。

供給本 134-135 頁

ポーランド・ボヘミア・ハンガリアなどの東ヨーロッパの国ぐにでも、ロシアと同じく、16 世紀から移動の禁止、賦役の強化など農奴制が強まった。

白表紙本 137 頁 (北・東ヨーロッパ)

貴族たちは王権との対抗上プロテスタントを導入したが、貴族の農奴制強化に反発する農民は冷淡である、カトリックのまきかえしにあってプロテスタントは発展できなかった。

二谷メモ：「プロテスタント」に下線を引いて「新教徒？」と書き込み。

供給本 135 頁

(削除)

白表紙本 137 頁 (挿図「ペテルブルク」)

ロシア帝国の主都 (1712~1918) として、経済的にも文化的にも反映した。18 世紀の銅版画。

二谷メモ：「ペテルブルク」に○を付けて「A」と書き込み。「主」を「首」と訂正してある。

供給本 135 頁

1703 年ネバ河口に建設され、ロシア帝国の首都 (1712~1918) として、経済的にも文化的にも反映した。1914 年にペトログラードと改称された。18 世紀の銅版画。

白表紙本 137 頁 (北・東ヨーロッパの変化)

ロシアはスウェーデンをやぶり、バルト海域に領土をひろげ、ネバ河口に新都ペテルブルクを建設し (1703 年)、ヨーロッパの新興勢力となった。

二谷メモ：「ペテルブルク」に○を付けて「A」と書き込み。

供給本 135 頁 (ロシア・プロイセンの台頭)

しかし、けっきょくスウェーデンはやぶれ、ロシアは、バルト海域に領土をひろげ、ヨーロッパの新興勢力となった。

白表紙本 137 頁 (北・東ヨーロッパの変化)

…、プロイセンでも、大地主貴族 (ユンカー) は農奴の賦役労働によって穀物を生産し、国外にも輸出した。官僚や軍隊の幹部は、ユンカーの子弟だけから選抜されて絶対王政に奉仕した。

二谷メモ：2 か所の「ユンカー」に○を付けて「のちの」「A」と書き込み。

供給本 135 頁 (ロシア・プロイセンの台頭)

…、プロイセンでも、地主貴族は農奴の賦役労働によって穀物を生産し、国外にも輸出した。官僚や軍隊の幹部は、地主貴族の子弟だけから選抜されて絶対王政に奉仕した。

白表紙本 138 頁 (地図「北方戦争」)

(地図中の矢印の説明) 「カール 12 世の遠征路」

二谷メモ：「カール 12 世」に○を付けて「本文にないので A」と書き込み。

供給本 136 頁

(変更なし) (135 頁の本文中に「カール 12 世」を追加している)

白表紙本 138 頁 (北・東ヨーロッパの変化)

1740 年、プロイセン国王となったフリードリヒ 2 世は、バイエルン・ザクセンの諸侯とともに、神聖ローマ皇帝の娘マリア＝テレジアの帝位継承に反対して、オーストリア継承戦争

(1740～48年)をおこし、オーストリアからシュレジェン(シレジア)をうばった。やぶれたマリア＝テレジアは内政をたてなおし、フランス・ロシアとむすび、プロイセンと七年戦争(1756～63年)をたたかったが、けっきょく、シュレジェンの併合をゆるすことになった。

二谷メモ：「神聖ローマ帝国」「オーストリア」に○を付けて、「整理して」「A」と書き込み。欄外に「イギリスがでてこない」と書き込み。

供給本 136 頁 (ロシア・プロイセンの台頭)

1740年、オーストリアでマリア＝テレジアが即位すると、ザクセン・バイエルンなどのドイツ諸侯やフランスがその継承権を認めず、オーストリア継承戦争(1740～48年)をおこした。プロイセンのフリードリヒ2世もこれに加わり、オーストリア領シュレジェン(シレジア)をうばった。やぶれたマリア＝テレジアは内政をたてなおし、シュレジェン奪回のため、ロシアや宿敵フランスともむすんでプロイセンと七年戦争(1756～63年)をおこした。このときイギリスは、プロイセンとむすんで海外でフランスをやぶり、プロイセンもいちじは苦境にたったが、けっきょくシュレジェンの確保に成功した。

白表紙本 139 頁 (18世紀後半の北・東ヨーロッパ)

これに奮起したポーランドの政治・産業・文化はかえって活気をおび、1791年にはヨーロッパ最初の憲法も制定されたが、3国の干渉はなおつづき、1793年(第二次)・1795年(第三次)の分割でポーランドは完全に3国に分割されて滅亡した。

二谷メモ：「奮起した」に下線を引いて「B」と書き込み。「活気をおび」に下線を引いて「なぜか」と書き込み。「ポーランドは完全に3国に分割されて滅亡した」に下線を引いて「つかめない」「B」と書き込み。

供給本 137 頁 (ポーランド分割)

これがポーランド人を奮起させ、政治・産業・文化の各分野で活気がうまれ、1791年にはヨーロッパ最初の憲法も制定された。しかし、このようなポーランドの動きに警戒した3国はなおも干渉をつづけ、フランス革命でヨーロッパに動揺がおこったのに乗じて、1793年(第二次)・1795年(第三次)と分割をおこなった。こうしてポーランドは滅亡し、第一次世界大戦後までの100余年間、ロシア・プロイセン・オーストリアの支配に苦しんだ。

白表紙本 140-142 頁 (第5章 アフリカ世界)

レポート：㊸詳細すぎる。

白表紙本 140-141 頁 (西アフリカと東アフリカ)

西アフリカでガーナ王国がおとろえたあと、13世紀にマリ王国が成立した。マリ王国をたてたスンジャータ王は、マリ王国の叙事詩に王国の英雄としてつたえられている。マリはイスラム化し、その名は富と文化と学芸によって、北アフリカをへてヨーロッパにも知られた。15世紀になると、マリ王国にかわってソンガイ王国がさかえ、ガオやチンブクツは交易と学芸の中心となった。

12～16世紀に、ダウ貿易がさかんにおこなわれ、東アフリカ沿岸の港市は大いににぎわった。アラブ商人やペルシア商人も東アフリカ貿易に従事し、アラビア語・ペルシア語を多くとりいれた東アフリカのことは、スワヒリ語も形成された。

二谷メモ：全体をくくって「不要」と書き込み。「ガオ」と「チンブクツ」に○を付けて「いれられるものは地図」「A」と書き込み。

供給本 138 頁

西アフリカでガーナ王国がおとろえたあと、13世紀にマリ王国が成立した。マリはイスラム化し、その名は富と文化と学芸によって、北アフリカをへてヨーロッパにも知られた。15世紀になると、マリ王国にかわってソンガイ王国がさかえ、ガオやチンブクツは交易と学芸の中心となった。

12～16世紀に、ダウ貿易がさかんにおこなわれ、東アフリカ沿岸の港市は大いににぎわった。アラブ商人やペルシア商人も東アフリカ貿易に従事し、アラビア語・ペルシア語を多くとりいれた東アフリカのことは、スワヒリ語も形成された。

(供給本 138 頁の地図「アフリカ諸王国」において、白表紙本 140 頁の地図「アフリカ諸王国の興亡」の説明文と「ガーナ」王国領域を削除し、地図名を改めて「ガオ」「チンプクツ」そして「ソンガイ」王国の領域を追加している。)

白表紙本 141 頁 (ヨーロッパ人の奴隷貿易)

これを奴隷貿易または三角貿易という。

二谷メモ: 「奴隷貿易または三角貿易」に○を付けて「表記」「A」「正確性」と書き込み。

供給本 139 頁

(削除)

白表紙本 141 頁 (ヨーロッパ人の奴隷貿易)

この奴隷貿易からえられた富によって、ヨーロッパの国ぐに、とくにイギリスの産業革命や資本主義経済の発展がささえられた。

二谷メモ: 「発展がささえられた」に下線と○を付けて、「表現」「促進」と書き込み。

供給本 139 頁

この奴隷貿易からえられた富によって、ヨーロッパの国ぐに、とくにイギリスの産業革命や資本主義経済の発展が促進された。

白表紙本 142 頁 (西アフリカ・南アフリカの発展)

南アフリカでは、17 世紀中ごろ、オランダがアフリカの南端に進出し、このコイコイン (ホッテントット) 族やコイサン (ブッシュマン) 族の土地を奪った。

二谷メモ: 「コイコイン (ホッテントット)」と「コイサン (ブッシュマン)」に○を付けて、「2 つ必要なし」「A」と書き込み。

供給本 140 頁

南アフリカでは、17 世紀中ごろ、オランダがアフリカの南端に進出し、このアフリカ人の土地を奪った。

白表紙本 143 頁 (挿絵「スペイン人のインディオ酷使」の説明)

スペイン人は、インディオの生命などを無視した強制労働によって金・銀を採掘させた。

二谷メモ: 「など」に○を付けて、「B」と書き込み。

供給本 141 頁

スペイン人は、インディオを使って金・銀を採掘させた。

白表紙本 144 頁 (スペインの侵入)

スペイン本国は、副王などの行政官を派遣し、まずノバエスパーニャ副王領 (旧アステカ領)を成立させた。ノバエスパーニャは、その後北アメリカにも領土をひろげ、16 世紀後半にはフィリピンをも征服し、カトリックを布教しながら太平洋をまたぐ貿易をはじめた。

二谷メモ: 全体をくくって「B」「不要」と書き込み。「ノバエスパーニャ副王領」に下線を引いて「A」「図に」と書き込み。「カトリック」に○をして「ローマ公教」と書き込み。

供給本 142 頁

スペインは、副王などの行政官を派遣し、ノバエスパーニャ副王領 (メキシコ) などを成立させた。

白表紙本 144-145 頁 (中南米植民地の社会)

征服者たちはしだいに土着化し、クリオーリョとよばれ、国王から委託された土地を自己の所有物とした。植民地の産業は本国の重商主義政策によって制限され、工業製品はほとんど本国からの輸入にたよった。クリオーリョがプランテーションや鉱山であげた利益の多くは、こうして本国に吸い上げられた。いっぽう、副王領の行政官や上級聖職者は、本国派遣のスペイン人に独占されていた。メスチソ (白人とインディオの混血) やムラト (白人と黒人の混血) など、多くの混血人がうまれ、皮膚の色の違いが階層の差をつくりだした。

二谷メモ：全体をくくって「不要」「B」と書き込み。

レポート：(10行分)㊸全部不必要。

供給本 142 頁（スペインの侵入）

中南米にわたったスペイン人たちは、しだいに土着化してクリオーリョとよばれた。かれらがプランテーションや鉱山であげた利益の多くは、本国に吸いあげられた。いっぽう、副王領の行政官や上級聖職者は、本国派遣のスペイン人に独占されていた。メスチソ（白人とインディオの混血）やムラト（白人と黒人の混血）などがふえ、皮膚の色の違いが階層の差をつくりだした。

白表紙本 145 頁（北アメリカ植民地の形成）

…、バージニアなど南部諸州では、大商人が白人年期契約労務者やアフリカの黒人奴隷を使って、タバコや綿花などの大農場を経営した。

二谷メモ：「大商人」と「大農場を経営」に○をして「B」と書き込み。

供給本 143 頁

…、バージニアなど南部諸州では、大地主が白人年期契約労務者やアフリカの黒人奴隷を使って、タバコや綿花などのプランテーションを経営した。

白表紙本 146 頁（北アメリカ植民地の形成）

1756 年にはじまる七年戦争で、フランスとイギリスはアメリカ大陸でもたたかったが、ここでは双方がインディアンを戦闘に使った。

二谷メモ：「インディアンを戦闘に使った」に下線を引いて「と同盟して」と書き込み。

レポート：㊸同盟してたたかった。正確な表現を。

供給本 143 頁

1756 年にはじまる七年戦争で、フランスとイギリスはアメリカ大陸でもたたかったが、ここでは双方がインディアンと同盟してたたかった。

白表紙本 147 頁（挿図「狩猟をするオーストラリア先住民」の説明）

かれらはすぐれた狩猟技術と道具をもち、ブーメラン（左）や、ウーメラ（右）とよばれる槍投げ器を使った。

二谷メモ：「槍投げ器」に○を付けて「表現」「A」と書き込み。

供給本 144 頁

かれらはすぐれた狩猟技術と道具をもち、ブーメラン（左）や槍投げ器（右）を使った。

白表紙本 148 頁（北方ユーラシア諸民族の活動）

14 世紀後半になると、モンゴル帝国は崩壊した。北方ユーラシアはふたたび分裂したが、反面、中央ユーラシアでは新たに民族の形成がすすみ、15～16 世紀以後、今日までのおもな民族が成立していった。

二谷メモ：「北方ユーラシア」と「中央ユーラシア」に○を付けて線で結んで「A」と書き込み。

供給本 146 頁

14 世紀後半になると、モンゴル帝国は崩壊した。しかし、中央アジアでは新たに民族の形成がすすみ、15～16 世紀以後、今日までのおもな民族が成立していった。

白表紙本 148 頁（脚注②）

今日のモンゴル人民共和国のモンゴル人は、15 世紀以後のタタール（韃靼）族、とくにそのハルハ族の子孫である。

二谷メモ：全体をくくって「不要」と書き込み。

供給本 146 頁

今日のモンゴル人民共和国の国民は、15 世紀以後のタタール族の流れをくんでいる。

白表紙本 149 頁 (北方ユーラシア諸民族の活動)

二谷メモ：欄外に「固有名詞」「程度」「A」と書き込み。

供給本 146 頁

(「北方ユーラシア諸民族の活動」の部分ではエセンとダヤンの名が削除されている)

白表紙本 149 頁 (地図「ロシアの東進」の説明)

「1300 年ころまでのモスクワ公国」「1505 年ころまでの新領土」「1598 年までの新領土」

「ピョートル 1 世の死 (1725 年) までの新領土」「エカチェリナ 2 世の死 (1796 年) までの新領土」

二谷メモ：地図の説明をくくって「～年～年」「A」と書き込み。

供給本 147 頁

「1300 年ころまでのモスクワ公国」「1300 年ころ～1505 年ころの新領土」「1505 年ころ～1598 年の新領土」「1598～1725 年の新領土」「1725～1796 年の新領土」

中間主題 オスマン - トルコと西ヨーロッパ (15～16 世紀)

白表紙本 151 頁 (コンスタンチノーブルの陥落前後)

1439 年、反オスマン十字軍の足固めである東西教会統一のための宗教会議が、ビザンツ皇帝も出席してフィレンツェでひらかれたが、成果はなかった。

二谷メモ：「成果はなかった」に○を付けて「B」と書き込み。

供給本 149 頁

1439 年、反オスマン十字軍の足固めである東西教会統一のための宗教会議が、ビザンツ皇帝も出席してフィレンツェでひらかれたが、十字軍は結成できなかった。

白表紙本 151 頁 (コンスタンチノーブルの陥落前後)

…オスマン - トルコは、北はハンガリア王国と、南はベネチアとさかいを接するにいたった。

二谷メモ：「南」に○を付けて「A」と書き込み。

…オスマン - トルコは、北はハンガリア王国と、西はベネチアとさかいを接するにいたった。

白表紙本 151 頁 (西ヨーロッパ - ローマ公教世界の終末観)

このころ、キリスト教世界に終末がせまっている、その前に世界のすべての他教徒に布教し改宗させて、できるだけ多くの人びとを神の国にむかえいれなければ、みずからも救われない、という不安がひろがっていた。

二谷メモ：「キリスト教世界に終末がせまっている」に下線を引き、その中の「世界に終末」に○。「他教徒」の「他」に○を付けて「異」と書き込み。

供給本 149 頁 (ローマ公教世界の終末観)

このころ、世界に終末がせまっている、その前に世界のすべての他教徒に布教し改宗させて、できるだけ多くの人びとを神の国にむかえいれなければ、みずからも救われない、という不安がキリスト教徒の間にひろがっていた。

供給本 150 頁 (西ヨーロッパの世界進出)

15 世紀、西ヨーロッパの識者の間では、天動説ではあるが地球球体説が、イスラムの天文学・地理学に学んですでに普及していた。アメリカ大陸の存在すら、独立の大陸であるかどうかはわからなかったとしても、そのころのヨーロッパ人は感じていた形跡がある。

二谷メモ：「感じていた形跡」に○を付けて「B」「証拠」と書き込み。

供給本 150 頁

(変更なし)

白表紙本 152 頁 (西ヨーロッパの世界進出)

15 世紀末から発展してゆくヨーロッパ人勢力のユーラフロアジア・アメリコ - オセアニア世

界への進出は、実は、東方貿易の拡大という意味とともに、十字軍の継承・拡大という面ももっていた。

二谷メモ：「ユーラフロアジア」と「アメリコ - オセアニア」を線で結んで「B」と書き込み。

供給本 150 頁

15 世紀末から発展してゆくヨーロッパ人勢力のアフロユーラシア（ヨーロッパ・アフリカ・アジア）・アメリカ - オセアニア（アメリカ・オーストラリア・太平洋）世界への進出は、実は、東方貿易の拡大という意味とともに、十字軍の継承・拡大という面ももっていた。

.....

正誤表

茨木智志・大木匡尚「実教出版『高校世界史』白表紙本に見る 1977 年度の教科書検定について― 二谷貞夫所蔵本を中心に ― （上）」

（『歴史教育史研究』第 17 号、2019 年度）

頁・行	誤	正
77 頁・下から 16 行目	独立自演農民	独立自営農民
81 頁・下から 15 行目	ノバエスパーヒャ	ノバエスパーニャ